繡像

玉娃叢志家傳

二編

五

へ13
4270
2

繪本國姓爺忠義傳前篇巻之五　目録

第一回
李巌開封府得民心
闖賊各所の民を劫して衣財を集る図
李巌開封府の民の心を得る図

第二回
宋孩子見闖王
農民等知縣を打殺す図
李巌百姓を率て李自成に属す図

第三回
湯門闖將尊闖為喪官軍
宋孩子人の禍福を卜ふ図

へ13 4270 2
林美知夫
寄贈
91-2142

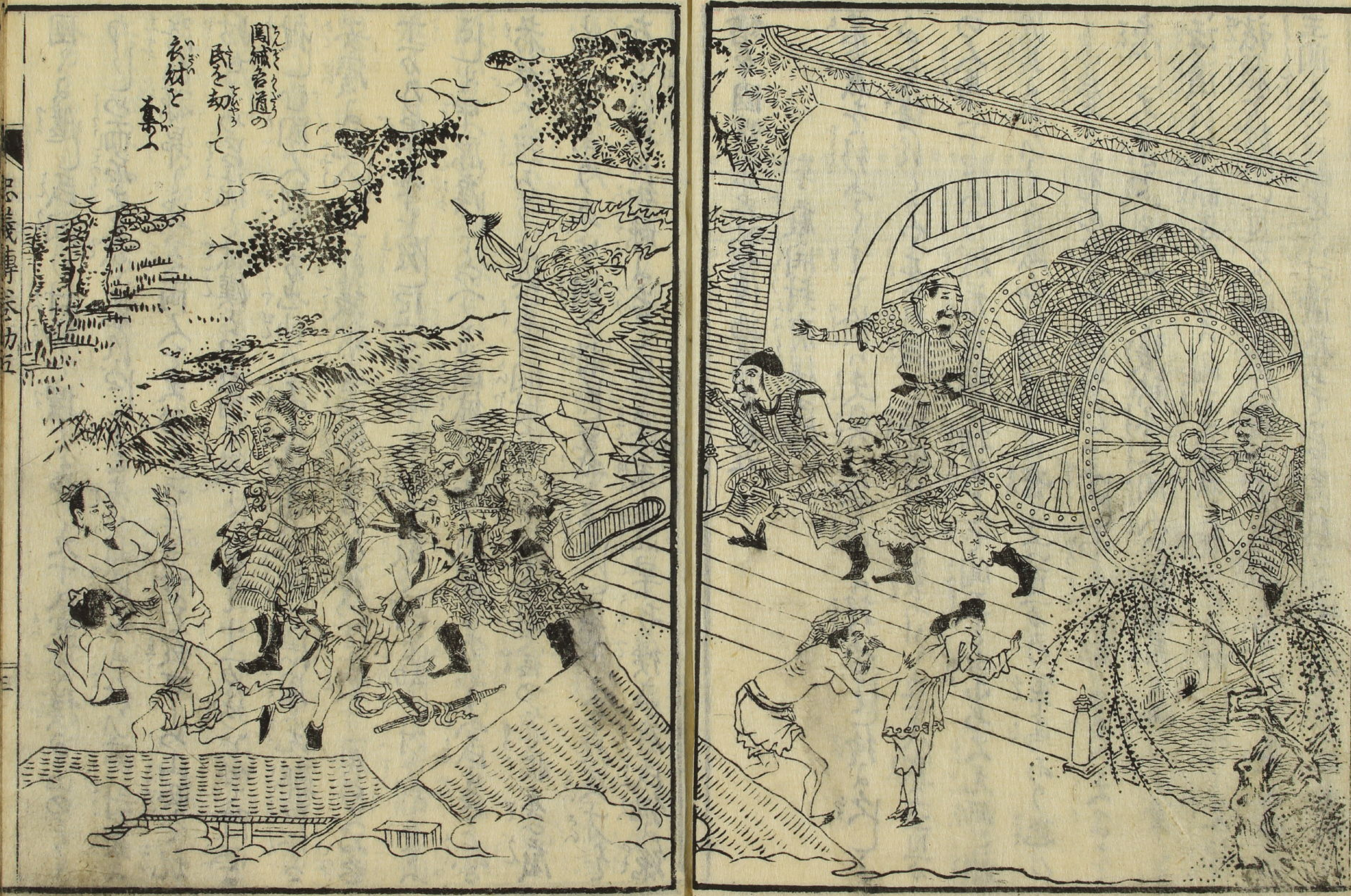
第八回

李自成福王を捕て福禄酒を作る図
蔣尊國級を定る図
周遇吉射眼李自成
腰風凶を示して車を碎く図
周遇吉李自成が眼を射る図

繪本國姓爺忠義傳後篇巻之五

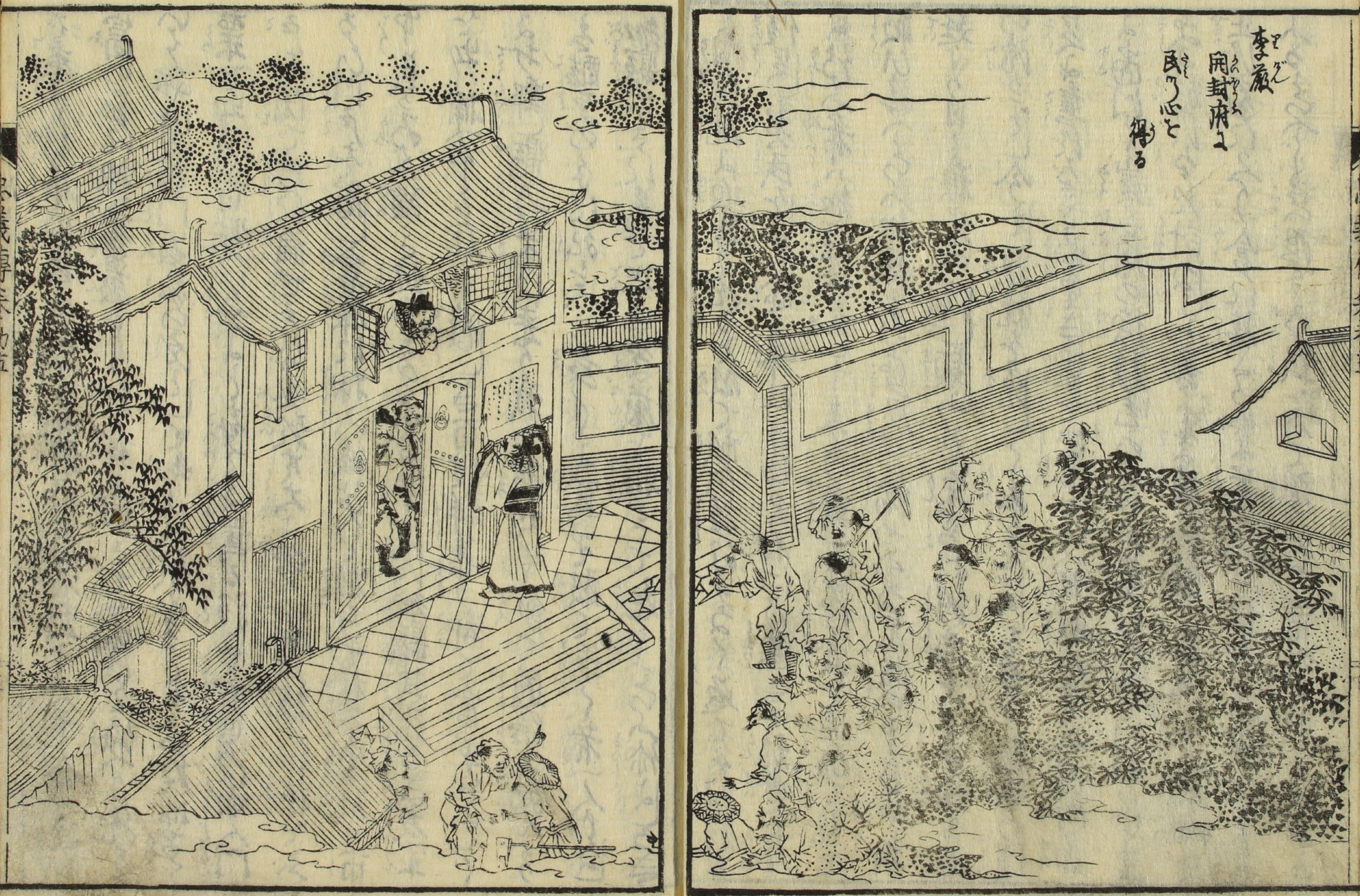
李巌開封府得民心

不義を行ふて生を偸れ夷臭乃釜中に游ぶがごとし縦ひ久しからずして身を得とも李自成が猛威日々に盛なりて九十八塞六十百万の人馬二十に人乃続首自成を押立て闖王と崇め大元帥と称し尊ぶ者に拠しく自成忽に思ふに吾に六百万乃軍馬あり然るに宮軍を斬屈しだし此勢ひに乗じ北京の都へ攻入て天下を奪ひし大業を図るべしと張献忠王闖人の両魁首を招き事を評議しぬ張献忠申さるは闖王大義を施さんと欲し給はゞ先糧を続く六百万の軍勢の糧を足しめ根を固くして進み給へ王闖人の曰献忠が計議極めて宜し先数万の軍馬を東西南北乃


圓續谷道の民を劫して衣財を奪ふ

國〻に遣し民間の財物を攫こと凡九十八塞に積て山のごとく
あらしめ而后大義と名づけしと云李自成大に悦び其計策に
從ひ孫昂と史定両人を大ねとして兵十万を從せしめ山西を乱
妨せしめ呂佐と林漢といふ者を魁として是も十万騎をもて陝西に
往しむ闖人訓と方也仙の両人は山東に赴き洪用光鄭曰仁は
安慶に乱入し其外張献忠王闖人等に從ひて數十萬の大將各
十万の軍卒を從しめ四方の國〻へ乱入て殺て民を劫し財宝を奪ふ
さしも中原廣しといへども闖賊の至らぬ國もなく人民害を蒙る
者挙て説べからず爰に開封府といふ所の縣官の名を李巖
といふ者あり平生財を軽んじ義を重んじ善く天下の英才を
交りし或日知縣に告て曰く連年荒旱打續き庶民飢に臨

む國郡既に迫まり貌るを救て救ひ施さるゝ返て是粗税を
催促し窮民をして途に啼泣せしむるは不仁の甚しき乱世の基
に候はん希くは知縣令を出し十年の貢を免し倉を開ひて飢を
救ひ給へといふに知縣是を受用ず縮めある所緩の中より朝
廷より日く粮米の催促頻りなり文書の到着ある事恰も雨
の降ごとし今も粗税を免しなば何を以て朝廷の経
費に充ん然ば罪を蒙らん此凡勅命なれば今の時節
に當ては山東河南の諸糧是を取るや閑に大乱を引出しとも
更に難く知らず計なしと言李巖は知縣が言を聞て朦朧して
止く家に入り倉に積る粟米と取り出し百姓にあたへ
なりといへども只限りある穀を以て限りなき百姓を救ふべき道



李廣開封府に民の心を得る

だ悪く紛屁ば是よろしく無頼の悪者数十人を合せ豪家富の家に押入李巌をもつて穀倉を開させて貧民に施して銭をいかんやけ豪家門前の家としても知らぬば銭もさるてたた施すれや粟を出して百姓に与へよと責て罵る程に各番の家人門戸を閉て共に論ぜざれば無頼共大に怒り石礫投かけ棒をふるひ門戸を毀し倉庫に押入後には火を放ちて焼失ひたれば市中是が為に騒ぎ乱るゝの大方ならず知県甚だ驚き官軍を出し捕へんとすれども厳しき百姓群集り却て官軍とさんざに打鄭ふ知県の前に来り我を殺せと節て道路に叩んよりま酷吏のためにちぢく飢てよしと罵り罷て退く者一人もなし知県大きに是を恐れ李巌を招きて吾にておのれの余よしろき施しをなしてねよりは大変と引出せり今百姓集りて散ざるものなしいかにもして好からんや李巌の曰く榜一箇の告文を書暫く租税を免し給ば百姓等必ず悦び退くべしと知県是に従ひ李巌に命じて告文を写さしむる其詞に曰く

杞県正堂　示為暫停徴比以慰窮黎事照得今
國課雖厳民情更急因今歳荒特甚飢饉難堪
不得不暫停徴比俟秋成有済再行
開限爾百姓亦各安心静聴毋得聚衆喧嘩以
取罪戻

崇禎八年七月　初旬　日示

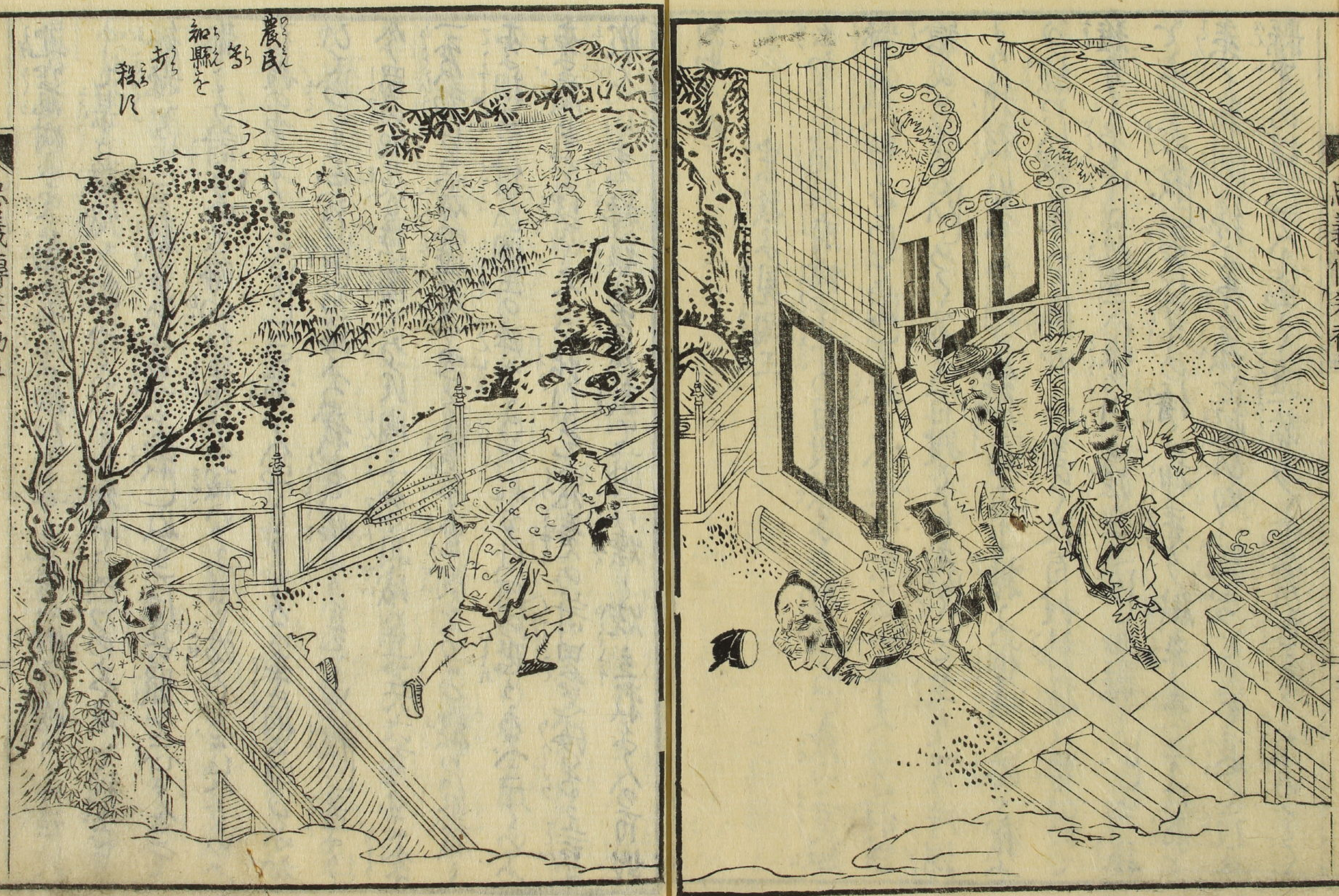
李巌自告文を持て県門の柱に粘貼けると衆くの百姓望を

なさく手に相謂て曰李巌自ら不ぐれの告文の旨に似りあらじとて悉く激じ去まり知縣ハ李巌が得恨百姓の心を收めんとと忌憚ま本府の上司へ密かに人を馳て申けるハ李巌が心腹大に帝りとし家財を散じて民の心を結び顛國の大患となるべく図り給せずんバ無窮に害を遺さんと告ければ上司大に驚き重ての紀明にも及バず數百の官軍李巌が第宅をとり囲み從騎大勢群がり李巌を捕へる手に擬め牢獄へ引下ん諸の百姓是を見て忿こと大に怒り李巌相公ハ我儕を救ひ給へる恩人なるに今却てまがれ不害を受け獄に下るとて不思議なれバ民と害ふ狗官等悉く打殺し李巌を奪て知縣となどなぐじと近隣の百姓群集り刄を砍て鉄を磨き衆大乱をを

引出しぬ

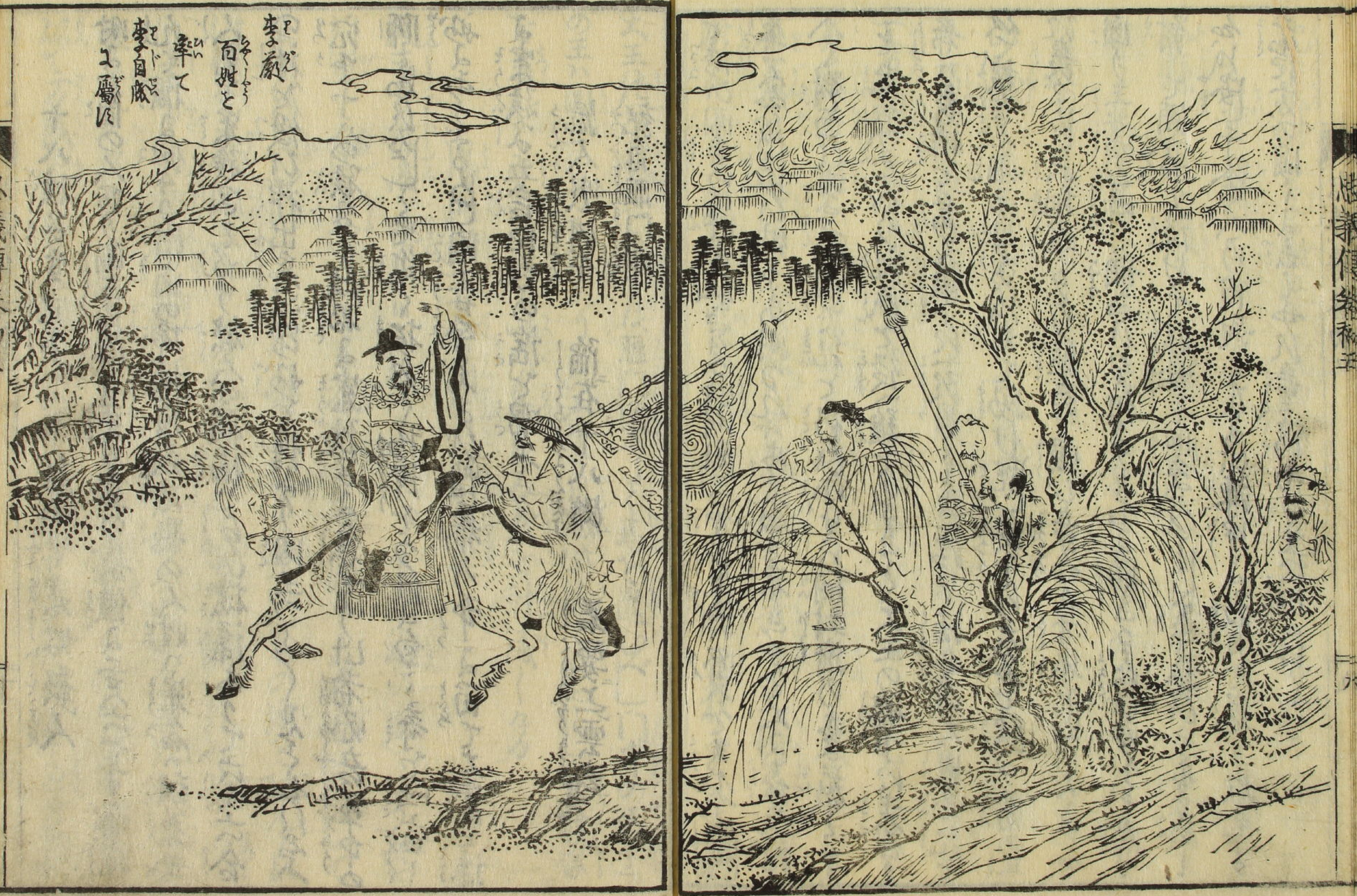
宋孩子見閻王

去ほどに開封府城中外の百姓數多く黨を結し衆の二更ふ知縣が衙へ押よせ門を破して乱入れば上下の士卒大きに勝き搶よ弓よとひしめくうちに百姓ども犇々と立まちより斤閣より斬殺ば是よりぞ衙中の上下擧りて相遠し防ぎ戦の縊りて我先にと逃出しが多く此百姓ら猛き勢ひにて雑なく衙中に乱入帳の内に隠しさりし知縣を捉出し棒とよりて打殺し更に牢の傍に押來り獄卒を追の者を悉く斬倒し終に李巌を救ひ出し凱歌をあげて退く程に縣中の役人一人も出ず遁着なく震ひ恐まて嵐のごとく


農民等
知縣を
歩殺ス

迦空嵐附に李巌衆人に向ひやう寺一附の勝りに絶え
して其が雑兵と做ふらへども却て又一ツの大事を引出せり
知県をはじめ数多の官士を殺しぬるにば其罪を正さんとて
都より討手の大勢向ひ来らん極いふまでもなく防ぐ為なれども
百姓の中よりまらざるしき者一人出て申けるハ李相公ハ今おか
ひて些しも心を苦しめ給ふな我衆始より是と思惟し毒より
今蜀の地方に強盗となる闖王李自成ハ其兵ハ六百万に余
一度動けば霹靂の震ふが如く官兵を曽て制すること能はず我々
李相公と伴ひ闖王の陣中に落なば何の恐るべき事かあらん
李巌是を聞て大に悦び究竟の計思量せし百姓等が言に
従んとて先県館に火を放て一附の標を焼立数多人の百姓

と誘ひ闖王の陣に趣きけるに此時闖王李自成ハ賢を好むと称し
李公が結び納るの時なれバ李巌が来るを大に悦び這
入て対面に及び李巌進で礼を終り小生ハ開封府の李巌と申
者数多人の飢民を従へ雑とのがまて大王の膝下に来ります
希ハ義勝と盃て帳下に一所同しく給はゞ活命の大恩必記と
致て報ぜん闖王自ら起て助け起し足下の名を聞る雷の耳
に来るごとし只相逢ふの遅きを恨む者なるに幸に忠と出し来るを
国の王業の基を開きけり何ぞ是に勝るものあらんとて席を
対して酒宴を設け其情恰も旧交の如し実に相和し李巌も
是より安じ千余人の百姓と共に此陣中に数月を送り居けるが
爰に方の国々に云ひ童謡あり其詞に曰く



李巖（りがん）百姓（ひやくしやう）を率（ひい）て李自成（りじせい）に屬（ぞく）に

十八孩子生宄下　自小生来好殺人

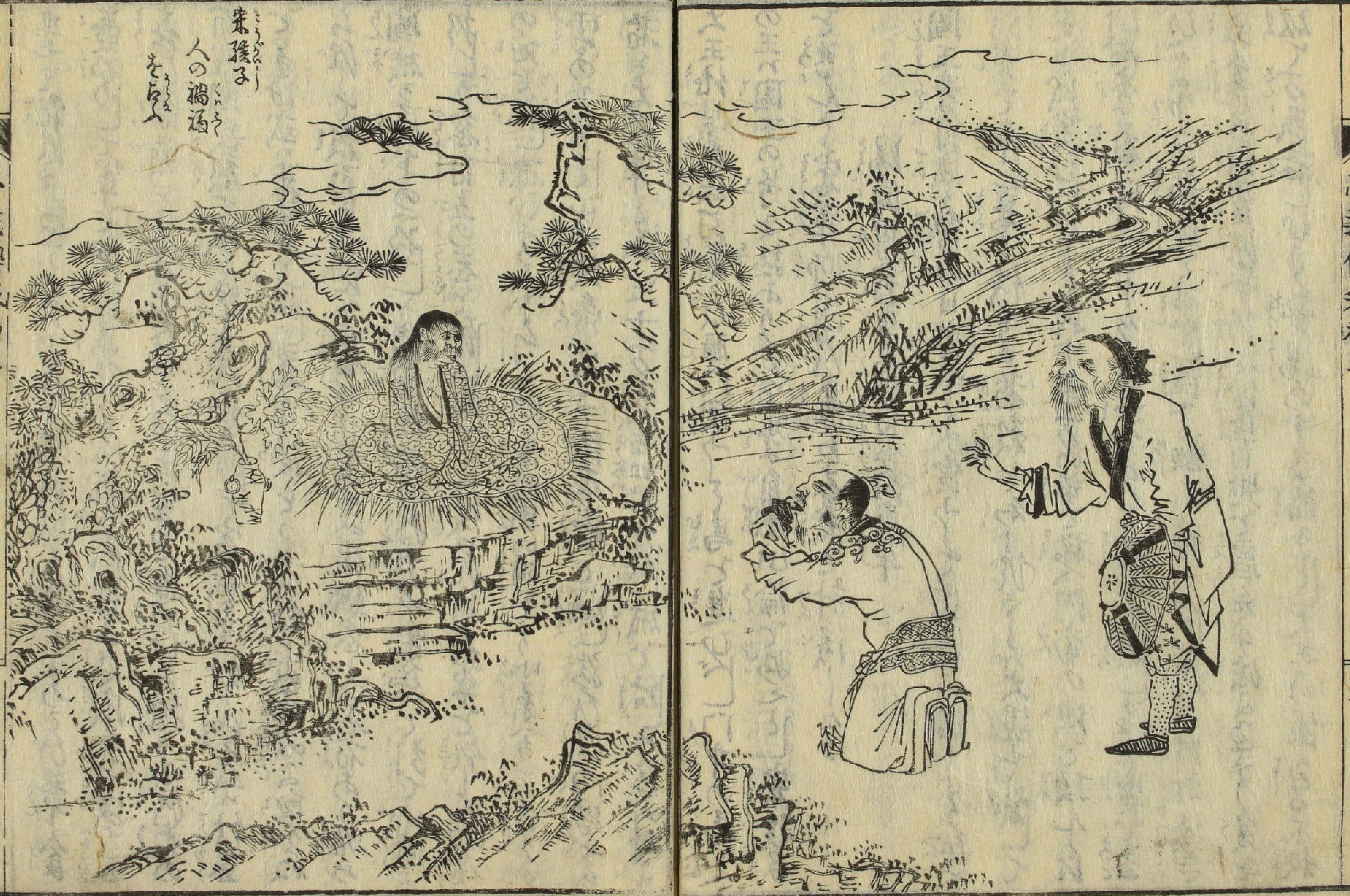
附に一箇の人あり闖王の陣に来る身の長僅に二尺六七寸面貌丸て猴に似たり河南の帰徳府永城縣の人姓ハ宋名ハ獻策世人是を宋孩子と呼り餘人の禍福を占ひ機謀ありて六壬に合の術を得ひ神出鬼没の妙を得たり闖王つねに是を左右に宄下十八の孩子とはまさに宋孩子に應せり此者闖王軍中の師となりしとぞ近く指を物語をもつて自ら奇を吐言に妙にあらざる也闖王甚よろこび帷幕の中に留て大業を謀る宋孩子五言にて左の謡を唱ふ

流人睡河干　陥在十八灘　若要上雲去
還自雁門關

大王他日義兵を起さば雁門關より馬を進むべし門中の馬上の王ハ闖王の号に縁ありとふ李自成此論を妙とし宋孩子を尊んで宋軍師と呼び専ら大義を計議しける

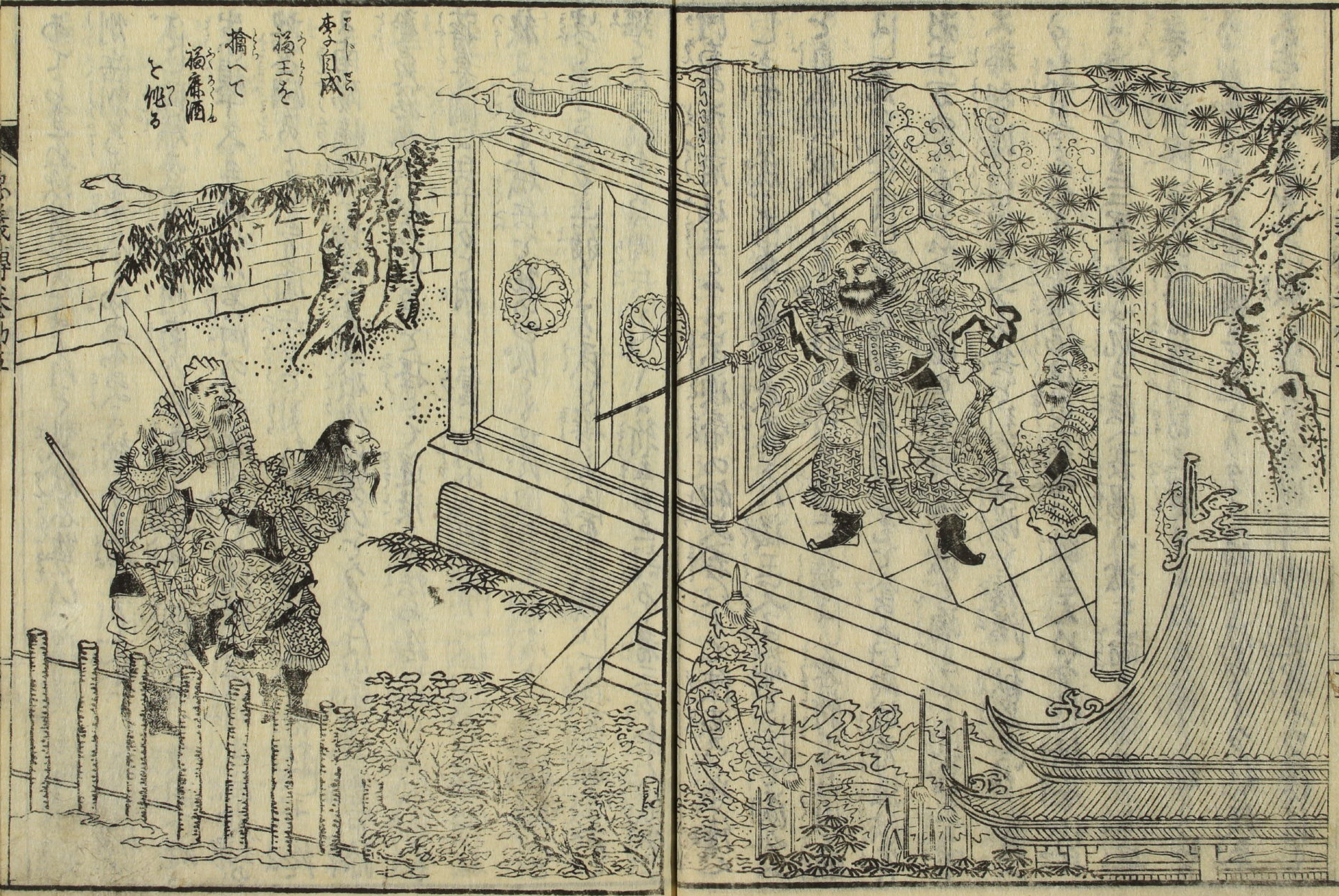
湯同昌為専闖為袁宗軍

闖王李自成が勢ひ日々に盛にして遠近の國々より兵を引軍を率し来り従ひける者数を知らず終に大軍を發して天下を従へんとて又十余万の勢を揃へ河南の地を攻んとす此附李巖闖王に申しけるハ王大なる事を圖んと欲し給ハゞまるび六より暴逆を禁じ民を恤み給ふべし近き比打續き年荒れ穀登らず奉行代官百姓を虐る法にあらざる家を破て万民苦しむ身に饑渇の中に陥るべし大王の軍亡る秋


衆孩子
人の禍福
をとふ

毫毛も犯ざるの臣といへバ天下の民欣て從ひよろこび簞食
壺漿して軍を迎へ王業忽ちに成就せしに李自成之を安て甚
誇び李巖を先手の大將となし大軍を進めける處に河南の
百姓闖兵へ叛て民を犯さず擾害して軍をまちぬれバ財宝
を運び或ハ米穀を献じ来り從ふ者數を知らず未幾の日をかさね
ずして數百里の地を略せり爰に又張獻忠といふ者あり始め
闖賊が屬下の一將たりしが諸國亂妨の為十万余騎を引て他國に
移りしが忽自立の志を起し闖王に從はず自大軍を卒して湖廣
の地を犯し掠むるにより湖廣河南の両所より小京へ急を告る
處の救なし宗禎帝大きに宸襟を悩し給ひ楊司昌に云
付て大將軍と為し二十万の官兵を發し賊を討しめ給ふ時に

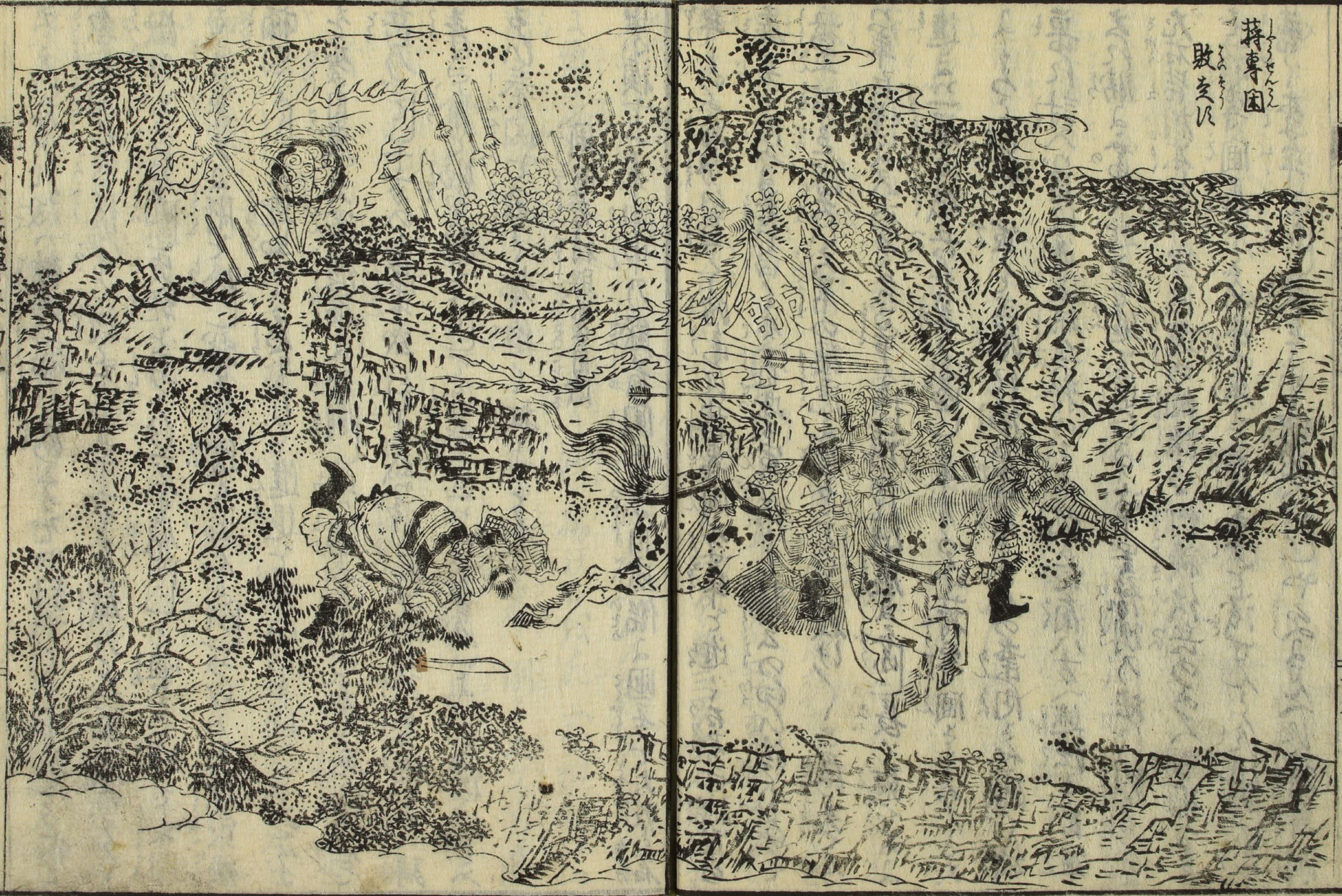
河南の藩府福王と申ハ宗禎帝の叔父君にして陝西に守護し
しが李自成が大軍に城を攻落され福王父子都をさして落給ふ
を自成兵ども追々追討し遂に福王を捕へ忽斬て其肉を醢
にし鹿の肉とまじへ福鹿酒と名付て是を食ふ此時賊首張獻忠
數十万の大軍を以て襄陽を責討防ぐ城を滅さんとす此時官軍
大都督楊司昌三十万の兵を引て襄陽を後詰し獻忠といどみ戰ふ
事數日に及ぶといへども元来楊司昌軍略に疎き大將なれバ獻忠が伏兵
にあひ終に三軍忽ちに乱れ遁れ襄陽の城も落城し藩府の公達
悉く討死し給ひ罪皆楊司昌が一身にかゝりぬれバ急ぎ都に帰
らず乱れし中にも自ら縊れて死せり名ある大將かくの如くなれバ從卒
東西に乱れ南北に散じ男女の百姓啼叫び逃惑ふ事掩ひ目も



李自成福王を擒へて福禄酒と做る

あてられ次第に是によつて張叔忠勢ひを得漢陽荊州襄州岳州等の小処へ向ふ所々の敵をちる者なく斧をもつて竹を破がごとし闖賊李自成は河南の地悉く斬従げ開封府を攻囲む時て崇禎十五年秋八月黄河の水漲に溢れ堤岸崩れ開封の地忽湖のごとくなりて闖兵力を用ひがたくして開封府を捨去りて終に南陽襄慶を切従へ是より破竹の勢ひとなれば崇禎帝孫督師再び大ね軍を揮て逆徒を誅んと兵部尚書蒋専闇に兵十万を附して営を河水の地に布しむ蒋専闇自ら才能に誇て賊兵を物のかずともせば闖王李自成蒋専闇が向ふと聞てまざと労れ弱りたる民を擇て官軍と戦はしむ蒋専闇味方を励まして大きに此をうちめば闖兵さんざんに斬立られ討るゝ者三万余人賊将李

牟といふ者勢ひ尽て降参しければ蒋専闇李牟を近づけて召寄賊軍の虚実を問ひけるに答て曰く李自成が軍兵とも蒋公の向ひ給ふと聞て衆軍色を失ひ犬羊の猛虎に逢るごとくおそれけると答へて今は軍兵僅に五六万なれども屯まじ此処に駐じ長く延て支に進まば一挙に賊兵を平ぐべしと申ければ蒋専闇さもあらんと大いによろこび軍を三隊に備へ李牟に案内させ深く賊巣に討入ば目に遮る賊兵は粉のごとく乱れ四角八方へ逃隠る官軍大に勝に乗り逃るを追て進むこと六千里穎州の地に到りけるに左右皆樹木繁り中に一道の細路あり何様伏兵のあるべき所なればこそ蒋専闇馬をとゞめ李牟を召て事を議せんとしけるに軍中曽て李牟を見ず何地へ行しや更に見えねば蒋専闇

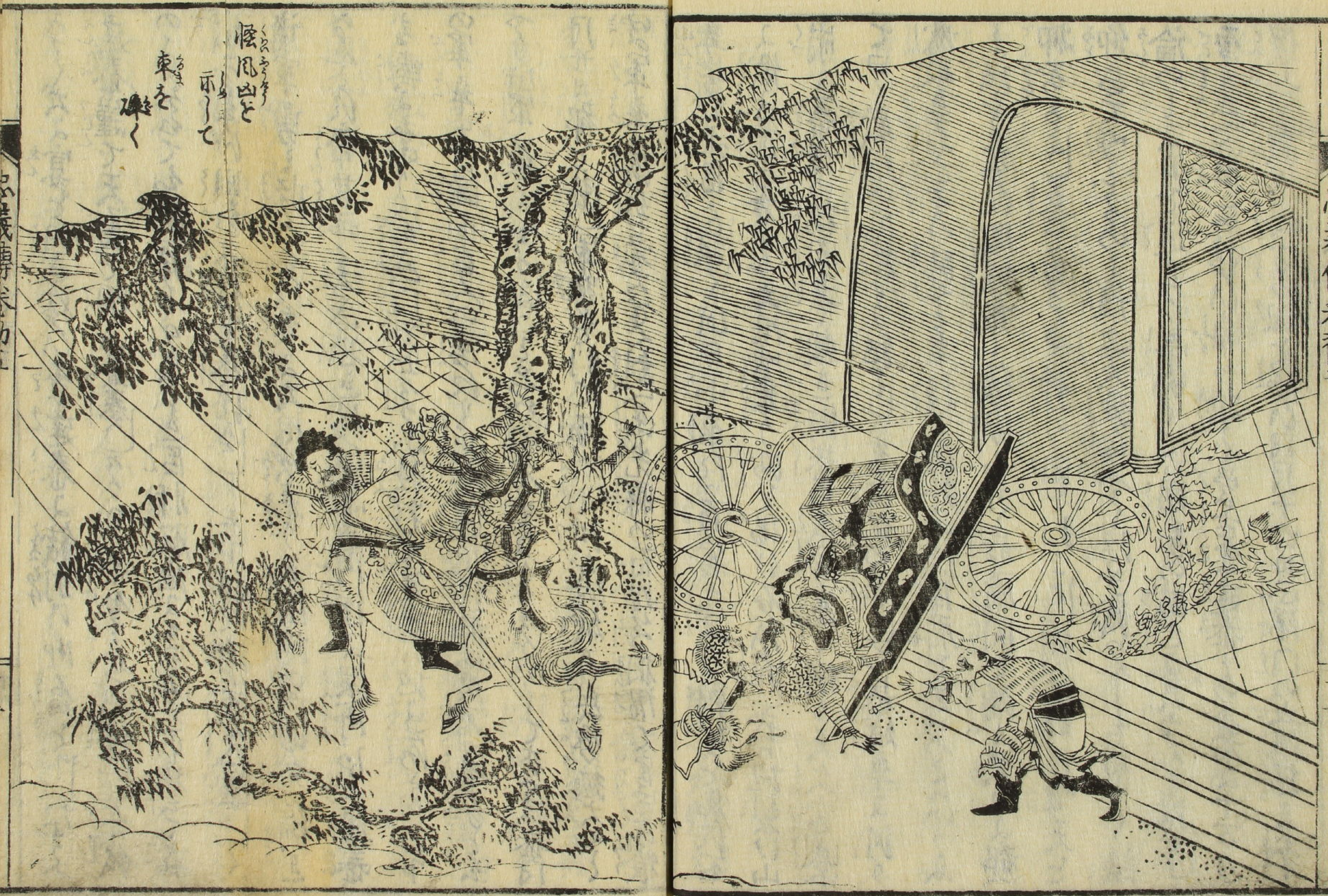


蔣専国敗走ス

天されし穀ハ敵ふ謀に落ちるぞや引やくと知らる事に忽相図の烏鳥筈く起て其ま十方より賊乃大軍潮のごとく湧き出て発飛し火炮を打かけ一人も余さじと喚てき叫て左囲む官軍大に肝を冷し我先に逃迷出んとしけれども敵軍旗桶のごとくして逃出べきるもなく進退を失ひけるを八方ろ李自成が大軍縦横に斬倒し血ハ流て川のごとく屍ハ積んで岳のごとし十万の官軍或ハ討れ或ハ降参し大将蒋尊ゞも只ゞ帰幸き命を助て都をさして逃登ゞが李自成いよゝ猛威をふるひ秦関をとてく都近く押よせる

周遇吉討死李自成

崇禎十七年甲申乃歳首闖王李自成僭に国号を大順と名年号を永昌と設く此日小年ハ百官元旦乃朝賀と為るに賊に西北の方より大風吹来り砂を揚げ石を飛し或ハ樹を抜け山崩る帝城の楼閣多く頽る街巷の民舎悉く倒る天文官奏て日く賊朝の凡飢より起りしハ是兵乱の兆にして悬賊率に到り城破るべきの験なりと申ければ内外の諸臣眉を顰めぬものハなかりにと議る所に闖賊並て猛勇ふる居庸関を過り不日に都へ押寄るよし急を告るに衛乃薗を引がごとし朝廷群臣唯天と仰ぎて嘆ずるのミ進ミ出二人犯して防ぎ戦ハんと云者なく議論のミに日を送る帝かくて国家の滅亡に及ふんと引きて聖慮を苦しめ給ひ自ら撰ぐ学士李建泰よ命ぎて十万乃逗兵を援け尚方の剣を賜ひ正月十六日正陽門の五鳳楼に李

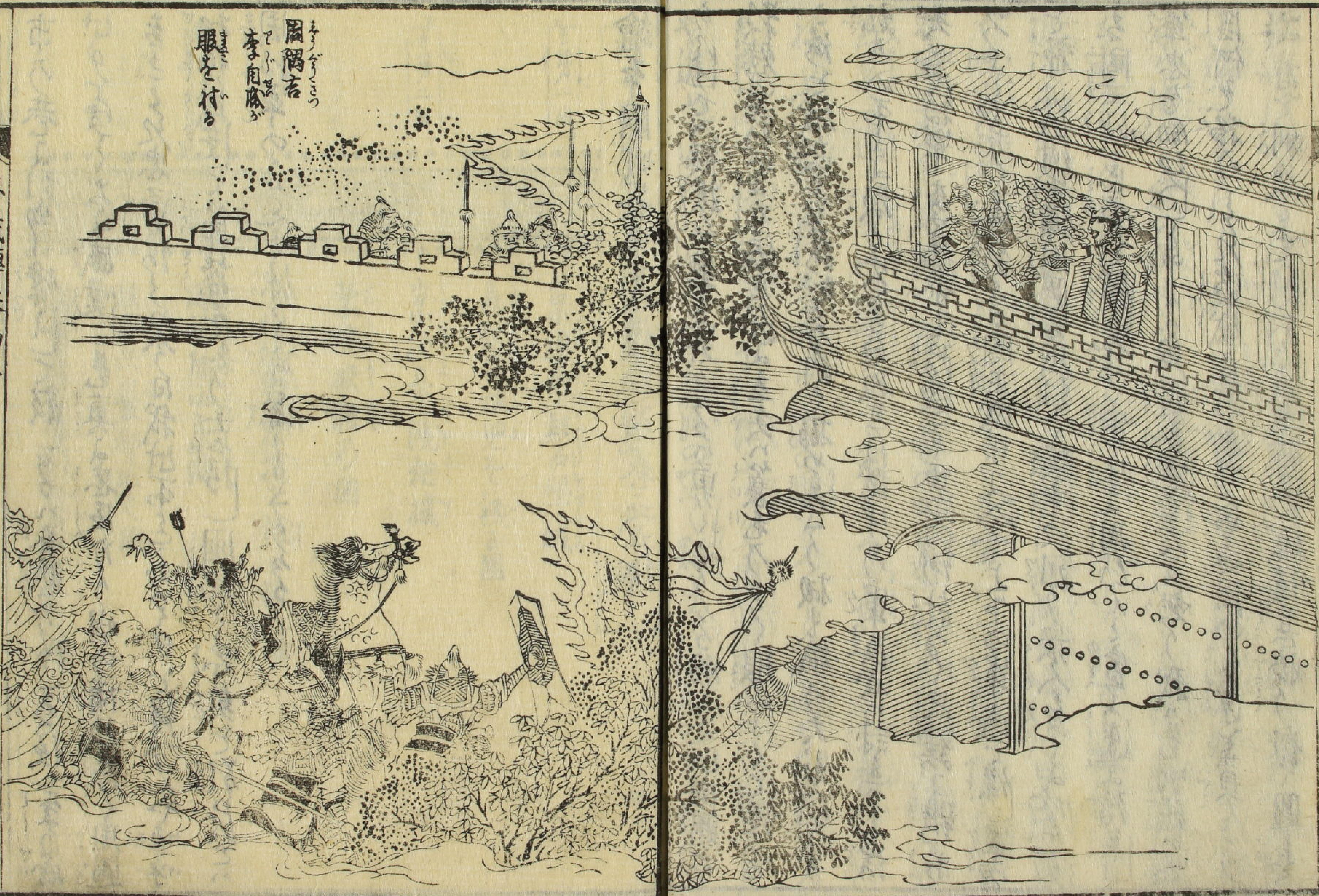

怪風凶と示して
東を碍く

なすく大に宴を開き給ひ李ハ建泰に餞別の御盃を下したまふ
建泰謹で天盃を頂き且奏しけるハ上恐多くも聖慮を悩し給ハん合戦
のうへにおいてハ臣肝脳地にまみるゝとも斬去て妖
賊を平げ国家安静を奏し候ハんと帝頻に御手を叉しく
諸軍勇ミ悦ぶ所に卒に大風吹来り鳳楼の門ゆるぎ倒れ
けんとし帝甚物かき恐ろしき怪を給ひ急ぎ内裡に還御ありし建泰
も輿に乗り宣武門を出るに小柱折て建泰ハ地に落けり上下
の軍卒大に驚き古人の語にも出兵遇風凶師傷不還と云
へり此軍甚しからましと云ぬ者もなかりけるが斯て李建泰は
月廿日都を發し軍勢を引て涿州に到る時賊の兵勢強大なると
聞き軍卒落行者大半に及ぶ剥光縣の百姓等猖獗て官軍の粮

穀を奪ふ賊軍に勝れしかバ此度ハ猶りに入ほどこそ城門を閉て
之を防ぐ建泰此体を見て大に怒り至る三日之を責て百姓
と追激し光縣城に入ぬれども教て又むるが數日に終る
三十里寧武関に到る寧武関の總兵周遇吉忠勇の強将
なれバ建泰と力を合せ賊を退け国家の災ひ排んと数万の兵を集
め関前に柵をふり逆賊李自成の来るを待居たり李自成ハ
幕下の大将苗人鳳といふ者大軍を引て寧武関に責寄せ周を
拙て戦ひを挑しけれ共周遇吉大に怒り選兵数万を引率し門を
開ひて斬て出日に余る賊の大軍を追返し戦ひけるが周遇吉
が搦手の賊を斬すて二万余人血の河を流し屍ハ草原に横
ふり去ほとに賊軍狼狽き大勢なれバ新手を入替おめひて

是まは周遇吉も兵を引入矢石を飛し鳥銃を放ち寇を禦ぎ
と防ぎたゝかひされども外に援の勢もなく兵粮漸に盡さて士卒
其八傷されの陣中には兵威漸く衰へて鳥銃石砲の弦弾
も雨のごとくなりしが八面より喚き叫んで賊より難なく城門をうち
破り李自成自ら大軍を従て殺到に周遇吉嘆じて曰く賊衆
く味方は寡し我討死の期こゝにきわまりと矢倉に上り賊軍を見渡せ
ば闖王李自成緋の袍に黄金の甲冑を着て白馬に跨り馬を躍らせ
真先に進み来るを周遇吉見て是こそよき敵ござんなれと矢番ひきりはなし
得たりと放つ矢に李自成が左の眼をぐさと射通させばさしもの
自成たまり得ず馬より下に落けるを周遇吉城兵を招きて是
や進めと手勢にて雲霞のごとく群る賊軍の中へ面もふ

らず切て入縦横無尽に突立たるは勇しかりける働きなり周遇吉
数剋の戦ひに労を身に立矢は蓑毛のごとく眼くらんで遂に
立処を賊兵どもが落かさなり擒め去り楓も賊の大軍に入り
乱て入城に数く火をかけ城中の軍民残れ討ち取て落
失せ大将軍李建泰も防ぎさゝゆべき術計なく只一騎で戦を棄
いづくともなく落行たる闖王城中に入て上下の軍民を撫し軍功
を称し此時生捕周遇吉が引て帳中に到り衆人共に縛したる
を闖王其の忠勇を感じ厚く軍中に用ひんと宣ふに速に降参し
軍忠を励めよと申たる所周遇吉大に怒り我は是明朝の忠
臣何ぞ将のごとき盗賊に降参せんや汝闖の如き逆賊を責んより
只首を刎よとて更に動く気色もなし賊徒甚腹立ち斬て周遇吉を


閻闘吉
李自成が
眼を射る

市の巷に引出し磔にして殺しぬれ無慙なりし次第に捜之麥白應
ばかりを聞て大に感嘆し是真に忠臣なり明の諸将悉く周遇
者ぞ定て忠勇なりし今日我此事をしるに至るまで得べからんや嗚呼
松栢の歳寒して節操を知り士は窮して國乱て忠貞を顕はすとかや是ハ
周の軍の事をしと深く感称しけるなる

繪本國姓爺忠義傳初篇巻之五終

繪本國姓爺忠義傳第篇巻之六　目録

第一回

崇禎帝封臣擧賊

長献忠雅児を熱る図

第二回

崇禎帝淺秘擄

禁中妖怪の図

崇禎帝秘擄を淺と図

第三回

闖賊陥北京城

猿子兵襲都城

揭燈籠而明朝絶基業之図

第九回 同

第十回 同

毀白面観音賊軍陥少京之図

賊軍犯帝都

李自成討兼王入門観之図

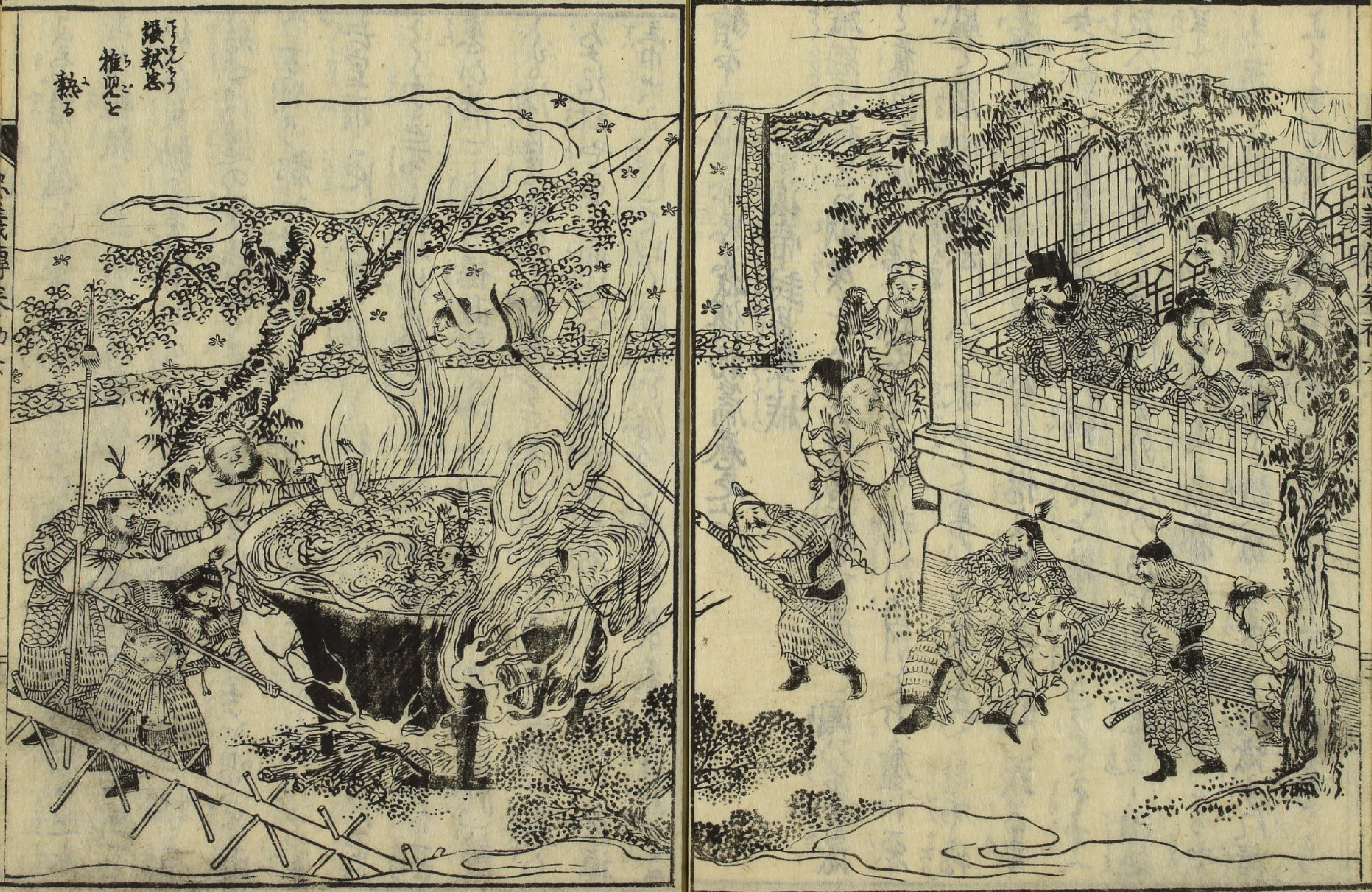
賊軍集妓婦宴宮中之図

劉伯温應図讖

繪本國姓爺忠義傳初篇巻之六

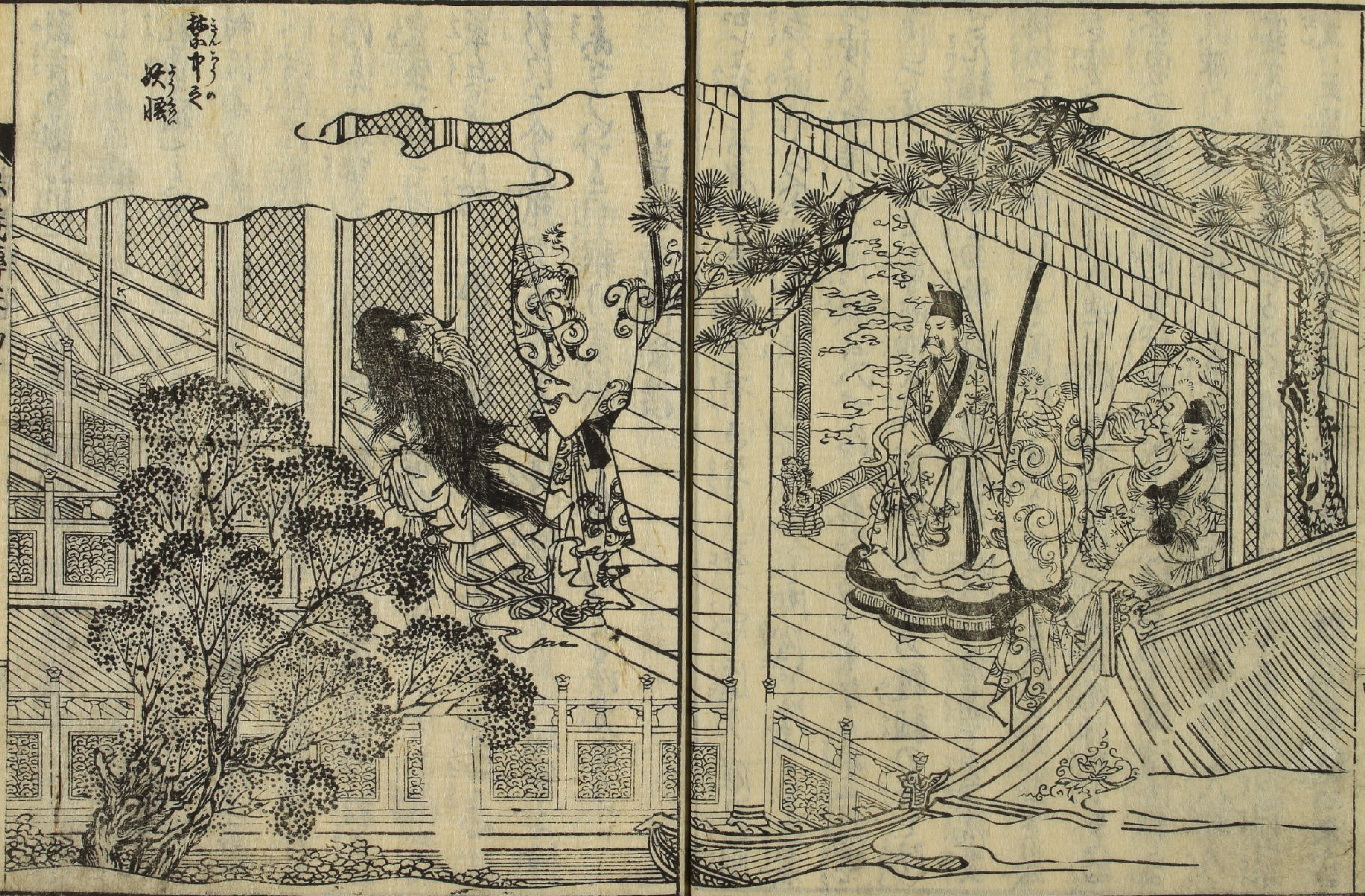
崇禎帝封呂撃賊

賊魁張献忠ハ湖広をさわがし蜀郡を攻落し闖将李自成と旧好を深く結び兵を合せて荊州岳州を打靡け悪威を震ふこと甚しく人の妻女を奪ひて小又とまで自家に備置き其側にて恣に淫し恥ぢて備に斬て之を殺し或は其女を割て男女を試み或ハ大鍋に湯を沸し稚きを其中へ投入て苦しむを見て悦とし其外人の腹を割て米豆を推込羊を飼て其肉の美なるをよろこび都て軍役の富めるを禁ずる悪く殺し其屍を以て城の外に積み城の上に積よくも見と嫌ハぬ撮乱人を心とくましく城上の守兵は立どころ


張献忠
稚児を
熱る

に気絶し城を築るの要害として専人を斬殺し附に遼東
には韃靼の軍勢威風弥盛んにして摂政王覇業の謀を
好び只勤王軍勢を引て明国と婚姻を結び仁政を布
施せば遠近の軍民深く其徳に懐き大清の国号を唱へ専南
の方明の都を攻破んと図りける又闖賊李自成は数百万の軍
兵宣府に屯し不日に禁内を犯さんとしかくれば天下鼎のお
こるが如く賊徒霧の起るに似て中国に掩ふ崇禎帝甚
患ひ苦しみ自ら徳政殿に御出ありて百官を集めて計議し給へ
ども諸臣只黙然と勅答する者一人もなし帝再三賊を退く
る紀計やあると問給へども弥応る者なし寔に於ひて崇禎
帝大に嘆じて曰く朕世を治めて既に十余年日夜政務に

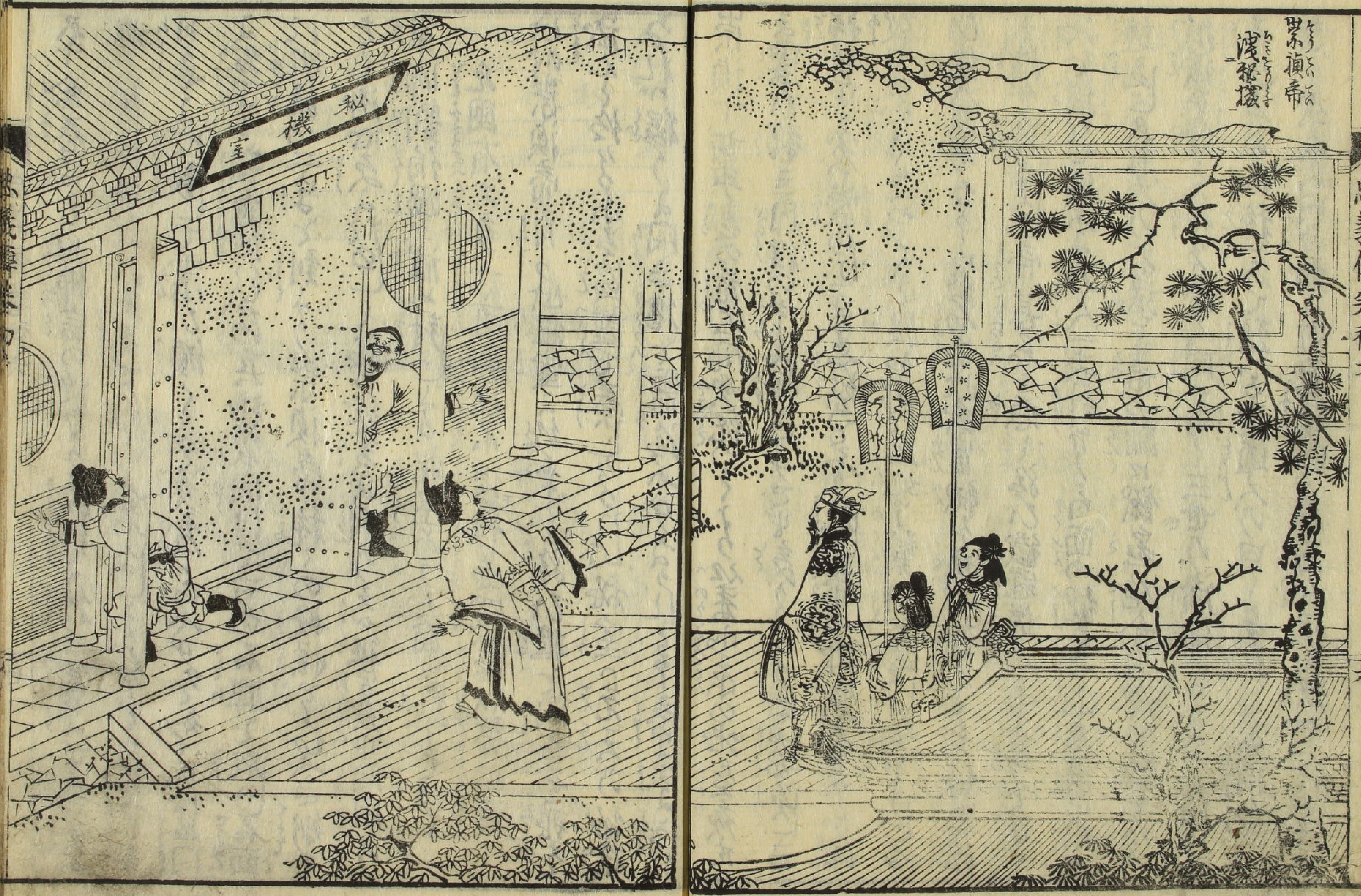
心を苦しめ身に華飾を省き専ら声色を遠ざく朕は亡国の
君に非ざれども臣は悉く亡国の臣なりと御涙を浮めさせ玉ふ衰衣
の袖を払ひ内殿に入せ給ふ哀むべし翌日詔を
下して呉三桂を寧西伯に封じ山海関を鎮め韃靼の兵を防
せ左龍玉を寧南伯に封じ張献忠を討しめ唐通を定西伯に
得功を靖南伯に封じて闖賊を退しめ給ふ去程に闖賊李自成
は勢を峯て楡林の地を犯し掠む此地の巡撫役馮師孔と云ふ
忠勇の誉ある者なりしが賊兵到ると聞て陣をつらね孫防撫崇
は陣門に五色の旗を立画に五方の神ねを立て八門に八卦の
霊文を押し其兵をなさくに卒に異なり賊の先ね鄧山宗
文は天羅地網の陣を張り四方の旗には麒麟鳳亀龍を象どき


禁中(きんちう)の妖怪(ようくわい)

敖多の隊ハ列をつらね孫周を揚て進ミ来る両陣一同に合戦となる
し矢石飛違ひ討つ討るゝ敖多が間息もなく継て賊の援師
孔勇猛といへども元来寡き勢なれば敖多限りある賊軍に
対ひがたき戦ひにもあらざれば次第くに陣営乱て終に軍中
に討死ス闖賊進んで昌列と手傷ハ守護の官軍を討
除し賊勢ハ先に利刀の竹を割がごとし定西伯唐通ハ敖多の
官軍を率て進み戦へども官兵共に糧尽て労ミ瘦衰へ
軍兵なれば何ぞ賊軍の猛く勇なるに当るべき皆怠落
折れて今ハ戦ふべき力もなく終に兜鎧を脱で賊軍に降
参せりいづれも明朝の義絶るを悲しからざる次第なり

崇禎帝深秘接

崇禎十七年春の首大風吹起つてより北京小京の地震動して
に震ひ動き内裡の中に騒ぎ立ても多かりける次第異しき
婦の白き衣裳の上に黒き袈裟をかけ乱し帝の御側にもやかに
現はれ出たるかと涙ながらに后妃天を拝し御殿に入りし給ふとしる
ひ絶入給ふをみれば宮中の文官諷をはりて斬んとすれば忽然
と消て跡もなし帝甚だ忌み悪み給ひ鉄冠道人といへる者を召く
妖を禳はせ給ふに道人一丈計なる白面の観音と小京城の巳門に
進ぜし又百人の大衆を集めて鍋に餓鬼施食の瑜伽壇を設け
紙銭を焼き祈る或人問て曰く三世の諸仏皆金色なるに此観
音はいかなれば白粉を以て粧へるや道人の曰く是経に所謂白仏
なり或人又問白仏は何の経に出るや道人曰く釈迦一代の説法


秘機室
宋禎帝
浅櫻擬

秘機之第一圖

又千余巻皆是白佛言の述なりと尭經に能て審にせよと蒙ふ
都下の道俗おどろきしを笑せざるハ無りしよりわづかに宮中に
日毎に鳴動して震ひ傾くる事度々なるを知りし宮門
に懸てる額忽地に落其地裂開けて一ツの石牌を現れし石面
に明治の二字を刻てり崇禎帝種々の妖怪止むべき術も
なく御心更に定まらず居給ひし時宮に明りたる祖宮帝開國乃
軍師劉伯温が残め封じたる秘室あり上面に刻して曰く
允國有大變方可開視不得輕易洩露以啓禍端
此時崇禎帝自ら此秘室に行幸し給ひ扉を開き玉ひ兆を
試んと給ふに左右近臣謹で奏しけるハ此秘室ハ先天の秘機
なれば猥りに開き給ふを需給ふまじと帝更に従ひ

秘機之 第二圖

秘機之 第三圖

孫はに官人に孫せて上包の紙を揭げ黄金の鎖をおし開き朱門の
扉を押ひらけ帝自ら進みのりせ給ふに室中へ入じて見るなりの
なく妖気月のごとく臣呼吸を止む帝を見じゝ内官両人膝擦ひ
肉動きさく驚きまろくりまはだぐり漸うく室中に出じ窓り
さしみれば目のなぐいて遣じ見るふ只朱塗の厨あり帝内官
に命じて其櫃を開かせ給ふに中に画軸三幅あり第一幅を開き
見るふ絵図あり左に云

文武の百官数多人皆冠を脱り髪を披き素足に
して殿上を走る図なり

帝御覧じて是何の図ぞ何の讖兆なるや内官謹で奏して
曰く此図恐くは是君の百官を退しむとも国法乱れ冠を脱て

殺ま遂る形なるらん帝再び第二軸を展て見給ふこれも絵図
なり左に云

若干の兵ね戈を倒にし甲を棄兜を脱し飢たる民乃男女
と雑り逃走の図なり

帝又見ていかにと問給ふに内官奏して主上兵馬中宵翁を捨て
不意の勝あらん帝勃然として変じ給へば内官皆頭を叩き謝る
不祥の物語給ふにいかにおかれ畢ぞしと元納めて掩はんとすれ帝
強て三軸を開き看給ふに画像あり左に云

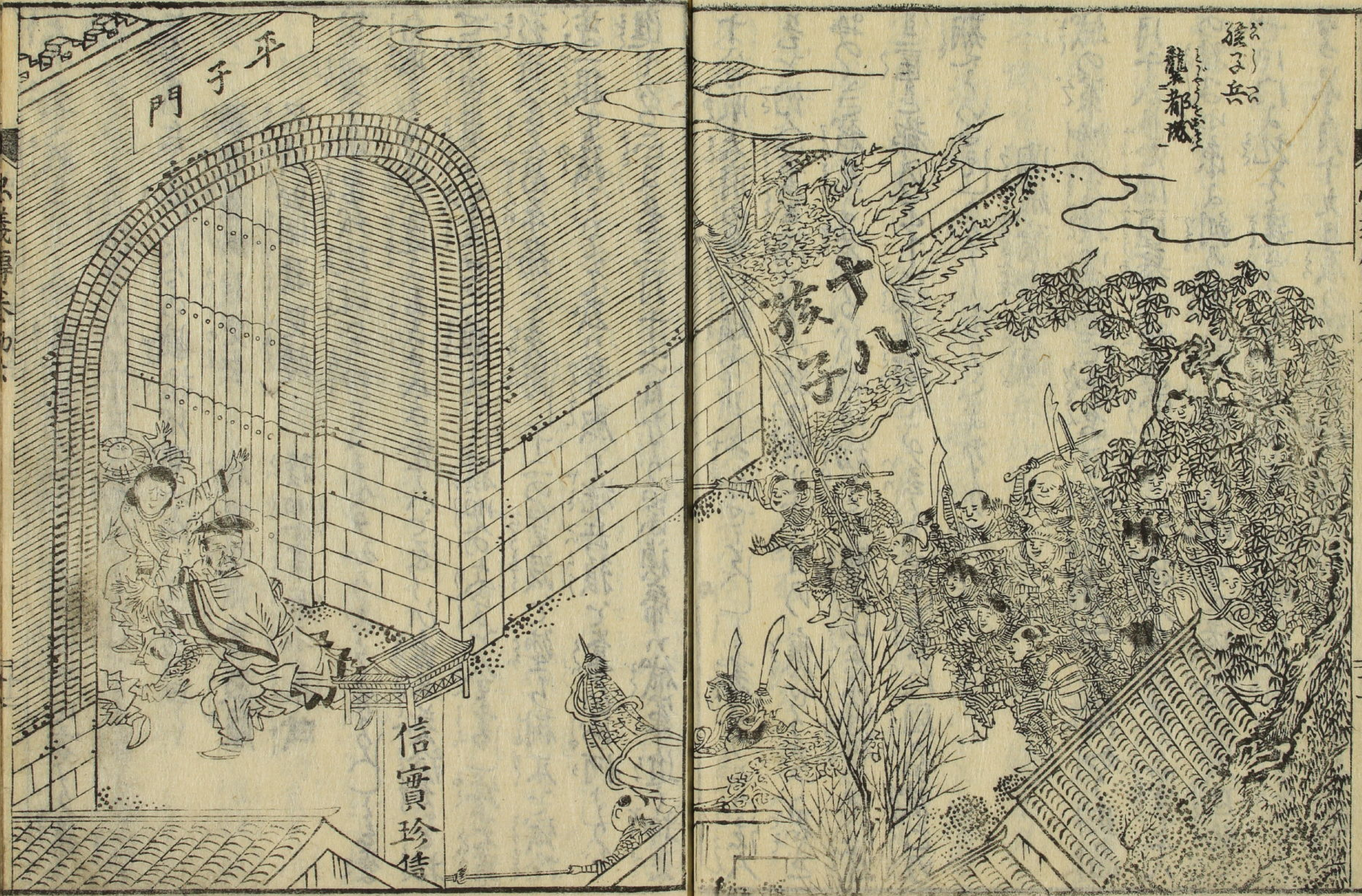
身には白き肩衣着右の足は跣にして左の足には
襪履をもち髪を乱し肩より胸まで衵もよく帝乃
尊容に似たり

帝又此像をいふと同時に内官蓄く曰く臣等が不肖を以
何ぞ未来の兆孫を濃さん縦令いかなる妖兆ありとも君の仁
徳よく民を治め政の正しきうへは祈に及ばじと聖意を慰
奉り給ふにぞ是と奏し帝御心やすく楽しく給ひて退
出ひらく宮に帰り給ふ去程に闖賊が兵は都近く押よせ寰内の
守城皆賊の手に掛ち八總兵知縣忠ある者は自ら縊れ死と
そふ者は賊に降り京師より西の郡縣は悉く風のごとく解ぬを
聞ては小京の人民安き心もなく下に小京の街に童謡
を流ひせ民を誘ひ十八の孩子小京に到ると謡ひ人民
是を聞て十八の子は李の字李を自成と示に到るならんと拆
恐怖周章ども附に闖王李自成小京の児門に牌を立て三月

十八日晩天府の會門鐃鼓しく矢合せ乞しと書きりかる諸人
是を仰へ此童謡の十八孩子恰も十八日の應せりとて恐れ
怖るき我先にと党ろ拾旋け幼きを携へ山谷深林の中に遁
れ隠れ都の上下擾れ騒ぐりが云んかた臣ご家ん国家滅亡の
期といふべしありさまなり

闖賊陥小京城

賊の軍師宋獻策は兒で小京の王気消亡せる所知り且当
月十八日は風雨暴く吹き雲霧天を掩ふたるを覧て十八
の孩子小京に到るの童謡を都下に流行せ諸人の心を恐動させ
せし門に札を建てるも皆宋軍師が計略且闖王に力へて
なれば今月十九日辰の刻に都城破る王の字を悉くとるに應驗

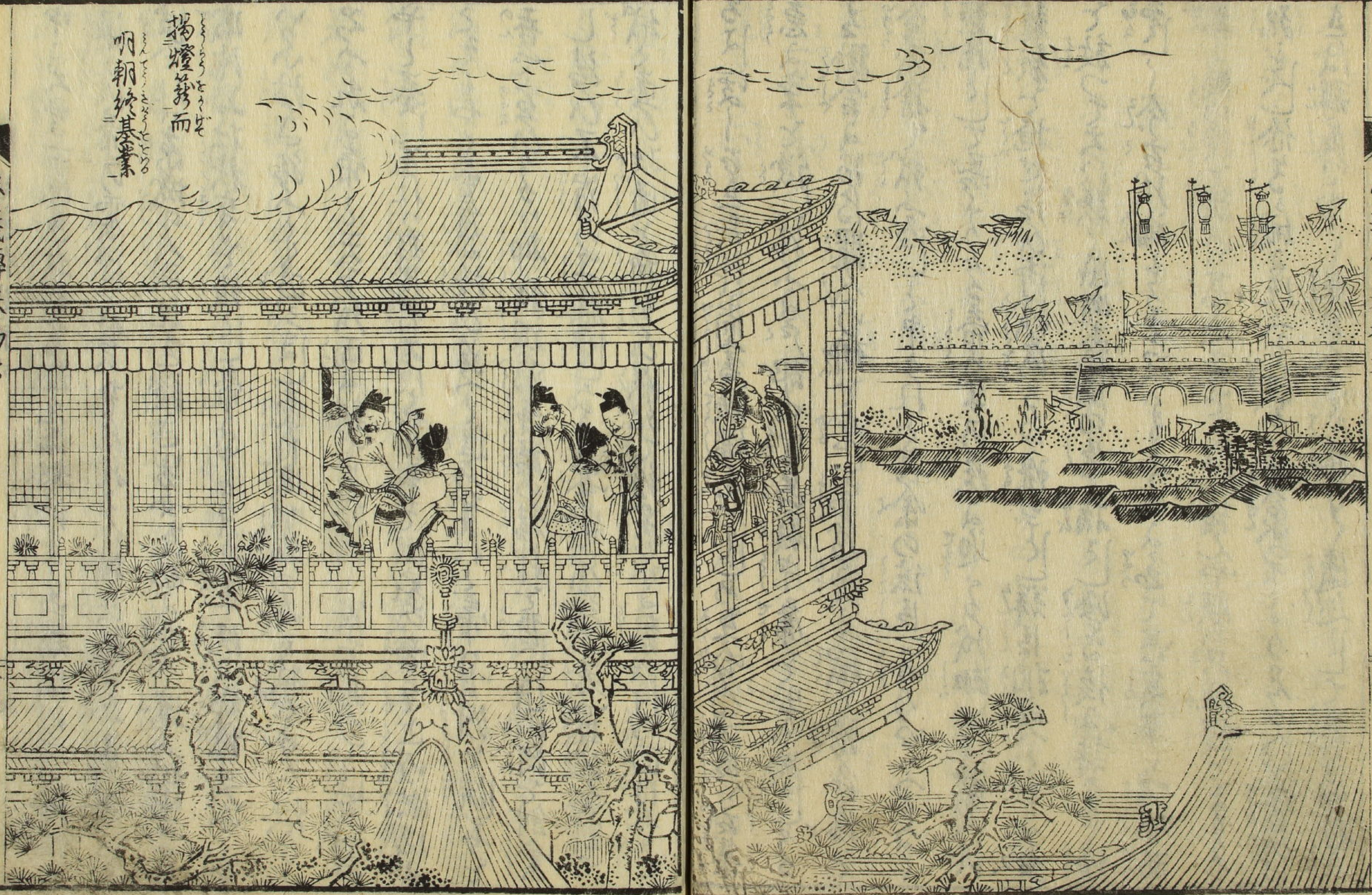

猴子兵(おんこへい)
龍翥都統(りやうしよとうとう)
十八孩子
平子門
信實珍傳

天の文に顕はる今若此擾に乗ぜざれば援兵四方より集り再びひろまるに及びなん大王十六家の兵に冠せざる事をと撰を前軍の兵に示しけるの讖語を唱へ合し其語に曰く

孩児軍師　孩児兵　孩児攻戮官敖寵
只消出一個孩児陣　孩児裹取小京城

かく唱へて小京城攻討は大功となるべしといふ事を自然に詐ひ速に童子ども千余人を募りて各々矢鏃刀を持せ甲冑爽に出立せ大纛に十八孩児の文字を金書し統て大軍数百万先陽平城を責落し十二の皇陵を壊ち樹木を伐採茎一根も残さずそ叡は亭殿を焼兵粮を奪ひ汝河より進むること是三月十六日なり宗復帝は賊軍近く押来

るよし聞て宜しく兵部尚書張叔夜を始め在合ふ諸臣を召集急に事を議し給ふに戸部の官呈庭中席を出て奏しけるは獄舎に訴へ罪人の刑を免し宝を与へて賊を防せ給ふべく今を捨て賊に降るしと申されど其余の諸臣一言の申すべき事なく黙然として居たりける帝は事の急に迫る事を知りしかば龍顔を掩せ給ひ御涙落るる事雨のごとし群臣相向ふてもの云ふ事を放つて大に歎く此時帝諸の臣を指さし給ふ後に詩書を読覚しく今古の論をする人も今日に至て甚だ矣なく唯朕が面前に然の涙を流すは甚の事とうし得んや朕は只社稷とともに死なんと仰せらるる賊に降ふべく諫るる黄泉の下より見んともを宣ひけれど群臣いよいよ奏すべき言葉なく逡巡として退き出ぬ其


掲燈籠而
明朝纘基業

中に太学士范景文尚書倪元璐都給事呉鱗徴の三人御側を
退りしが帝の震襟を慰め奉らんと城兵既に李賊が門に入ぬと
告奉れば京城の人民乱れ騒ぎ男女東西に走り逃入りけるが李自
成賊将杜秩亨を従へ帝の中宮には大軍既に都城に入今まで
いふ程こそ後宮もほぼ及ばし李自成明朝の今日滅んやと要る
名が我帝と天下を西に割て是を領し軍を息めて退くべき
やと奏しければ群臣皆是に従ひ是で国家の幸皇上の洪福に
こそあれやく李自成に従ひ降べしと進め申せしかど帝は涙を流して
吾ぞ宣ひけるは抑我祖高帝諸の精神を費し甘山河に創業
し給ひ不肖の子孫望みながら安楽を受く君一旦地を割て
賊と与へ政道を執り給ひ成後に後世泉下に諸き何の面目ありて

高皇帝に見え奉るべき地を割て済んよりハ寧ろ死せんにハ如じ
と縦横に奉りし杜秩亨を番に引出して斬せ給ひぬ報も帝
ハ太監王之心ハ忠臣を召し国丈王乃府に到り商議せんとし
給ひ斉門を守る番帝の自ら到り給ふをハ知らずして国丈宮に
疑ひを防ぐ帝ハ斉しく宮中へ帰り給へバ御母
君周后皇后節をおちて涕泣して宮中を走り出て天寿殿に
縊り大臣に報まつる忠ある番是を救ハざるやと叫びして出て
給ふ帝ハ城陥るを見給ひて彰義門破れ官軍在る者なく数
乱し帝慌しく後宮に入皇后もろとも系を経ぐまでに至りて
若迫し給へバ数多の宮女御衣を纏り御側に侍り何に為せ給ふ
乎とやし嘆呼ぶ形勢ハ僕哀て云んかたぞなき帝宮女等を見て

徐ゑもよく家を落て倉を扶ると勅し給ひ執て守城官を臣白
き燈籠三ツをかゝへて令し給ふ事急なれバ此燈籠を城門に
かゝぐべし峯に萬急にならバ二の燈籠をあげ火急迫て寡に進
退窮らバ三の燈籠をかゝげ上へ伝へし宮中に此燈籠を目當として
とく乾清宮に入らせ給ひ太子を寛王と周皇親に附託し給ひ永王
と劉皇親に託し社稷の傾覆天地祖宗に對して震懼せしむる然に
爾が父の罪之と両徒の本分と哀を致て悲く歎き相別て外に
出給ふよもや一ツの燈籠と見る挑る院に壽寧宮に入る長公
主に見え多ちえて淨涙し帝公主をよく斬殺さんとて剣を震て
向ひ給へども心もくるく斬ころく倒れ伏し給ひしが又思ひ返して一
刀に斬て公主を王のうち手を入て逃り給ふ尊

と切て肩に及ぶ公主あと叫て地に仆れ氣絶しぬ帝又入らせ
給ひけれバ帝又走り出て西宮に到んとし給ふに燈籠既
に三ツをかゝげたり帝御心擇るごとく宮中に入て見給ふに袁
貴妃自ら縊れ給ふ帝縄を切て地に墜し剣を以て斬殺し
又懿妃殺人を一時に刺殺し坤寧宮に到て周皇后の縊れ
給ふを見送し給ふまで一方皇極殿に登り帝景陽鐘を自撞き
なりし給へバその夜其盛んとして京城に遍く響けども文武
の官人一人も来る者なし帝深くうらひ三眼銅鎗をとり手に内監
數十人を率ゐ門より城にのぞみ見給へバ此時三の燈籠あかく掛垂
より帝長歎し天命既に盡たりと自ら指を刺血を滴りて遺
詔を寫し御衣の中に縫こみ給ひ髪をかき乱して面を掩ひ

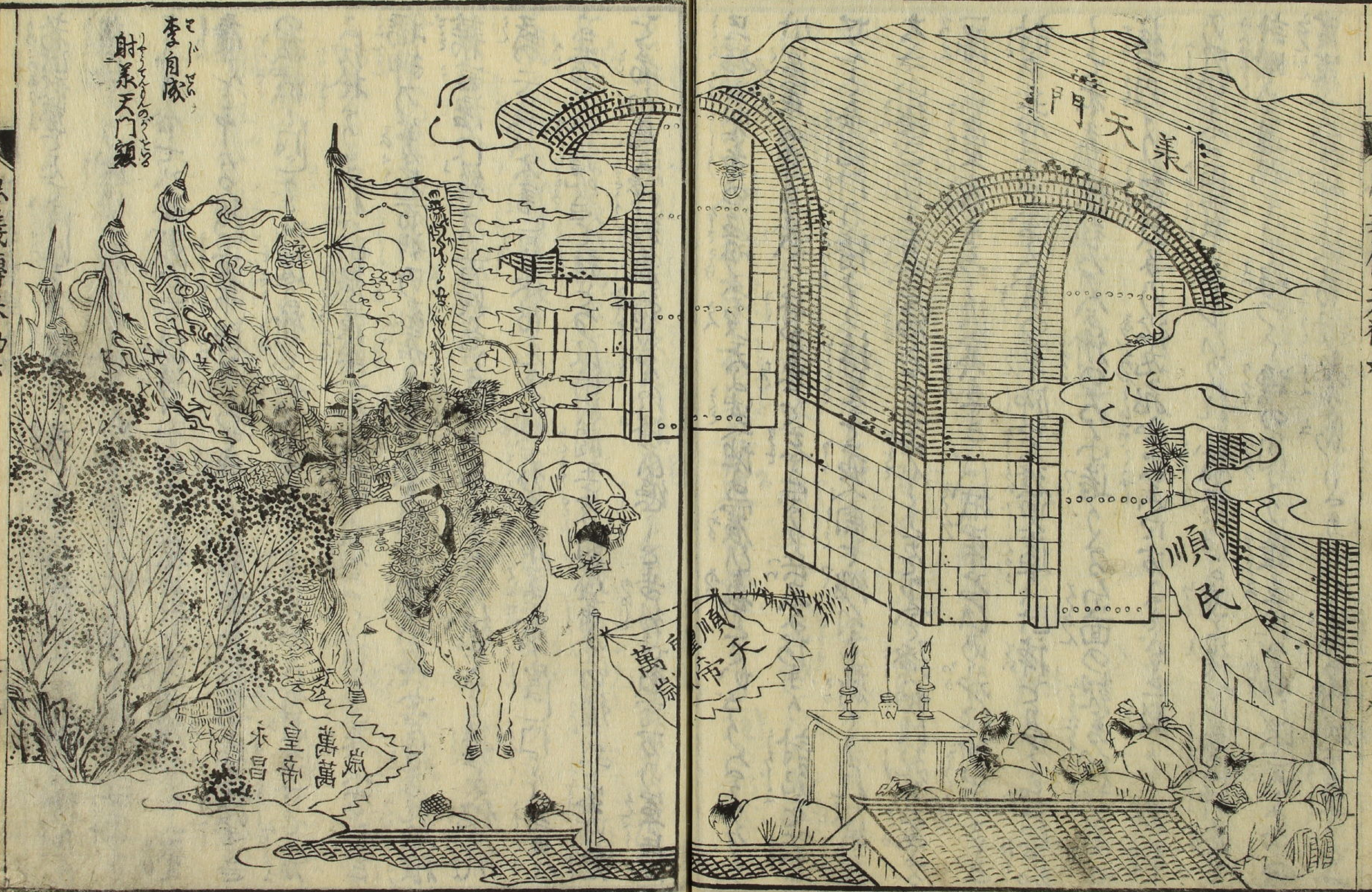
驍白面觀音
賊軍陥北京

宦徒の嫌ふて終て自ら滅び終に王之心は哀痛腸を裂裳竟に
扣回ひて縊れ死ん嗚呼悲い哉朱明三百年の金甌賊のために破られ
一旦の霜と消たるこそ真に古来いまだかくのごときの事稀にあらじ
実に崇禎十七年三月十八日のことなりける

賊軍乱二入帝都一

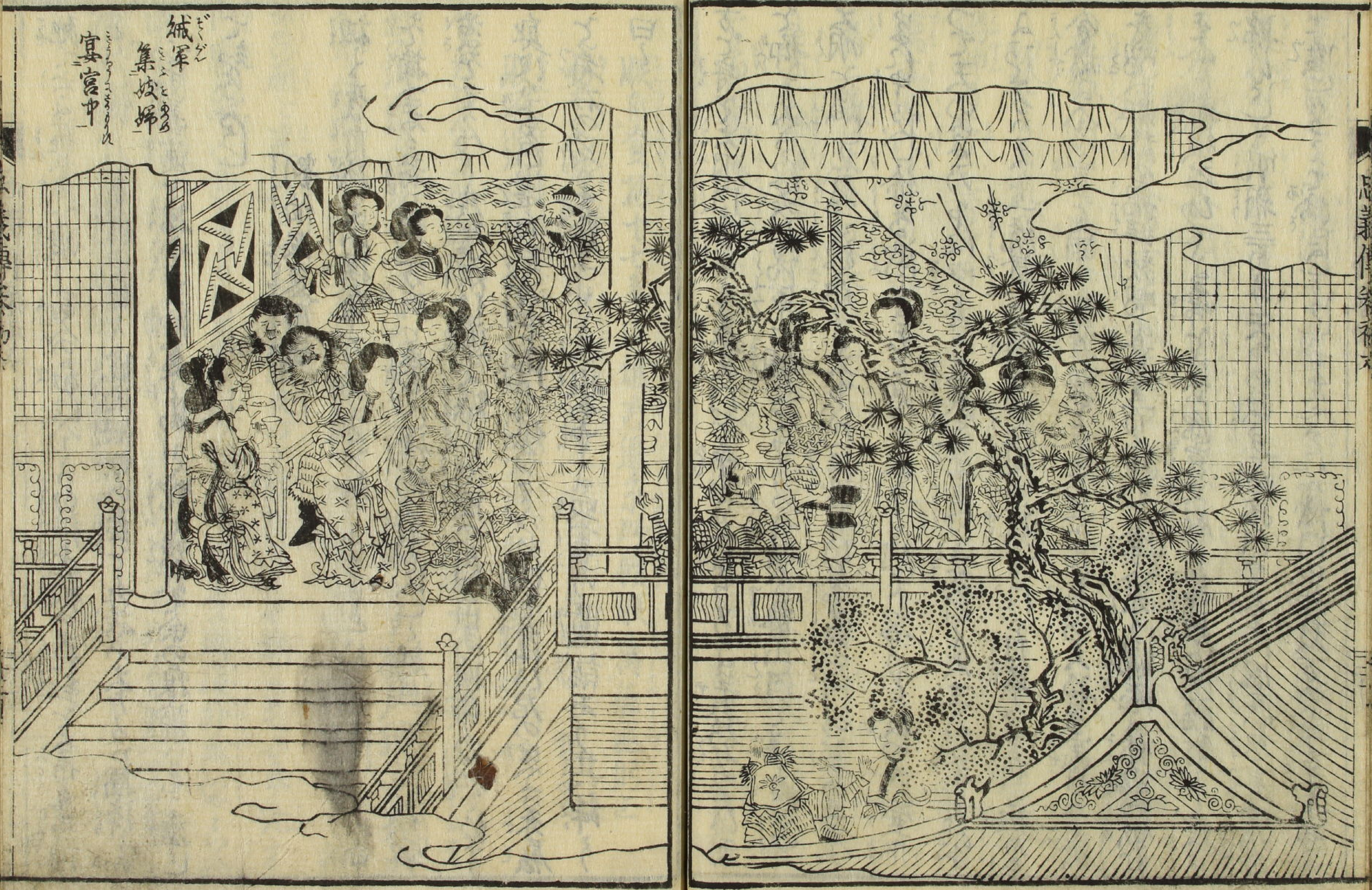
三月十八日の黎明より旋風たちまちを挙げ木の根を倒し屋舎を崩し
皆くろく雷雨みだれて飛び今や天地も滅却せんとす人々安き心
なし此時賊軍師宋猴児又多の兵を率て彰義門より
乱れ入て後撲に近ありて斬あれば官軍僅に六万計私兵多く逃
行後は朝廷文武の百官冠を捨て破笑より宝剣を抜て御獄ぬ
又数多の百姓は打まじりて遁れ出て都城の

只婦女児童の泣叫ぶ声天に響き地に震ひ哀とさながらなりけり
此官軍の中に義を守て忠を尽す兵多くありて討死を為よ
せんと西紀門の傍より辟易せず賊兵を防で斬てかかれば賊兵
大に躁ぎ乱て急ぎ多人を立並んと上を下へと騒動し起たる
一隊の官軍面もふらず突入ければ賊軍ともの外に斬崩され
討るる者三千余人賊の軍師宋猴児遙に此体を見て兵に下知
して和年頭冠たる人が術のために造りたる白面の鬼を打崩せ
後の門より忽数千の弾丸飛出来り四方よりさそ数しく官軍
の頭の上へ雨霰と投かけられば賊兵一時に力を得て宋軍師遙て
討略みな進めよと呼わりて懐の内より雜玉を出しければ哀しむべし数千余人の
官軍一人も残らず皆討死をなしたる実に御史王章なる


李(りじせい)自成
射(りやうてんもんのがくをいる)承天門額
承天門
順民
順天
皇帝
萬歳
歳
萬萬
皇帝
永昌

彼此形勢を見て滚流るゝ雨のごとく大刀を振て只一騎敵軍に斬入ば一騎当り
雜佐ら賊の大将牛金星より先大勇の壮士搶を捻て王嘉まう
まうり合七八合戦ひしが猿猴をのべて忽光を生捕牛金星に登
廣んと手る乃る王嘉眼をいからして睨ば白眼賊は明朝の忠臣海でき
の叛賊とは汝らの事よ是逆賊を斬て牛金星今は是非なしとて一刀
に切捨られば此後宮軍一人も余命ゐ希ぬく賊の王へ牢八方に乱を
搢紳の第宅百姓の家居に乱入金銀を奪ひ婦女を捕ふ乱妨狼
藉言語に絶たり百姓是を見て大に恐れ黄紙を出て難を避け
民の二字を書て貼し且永昌元年順天皇帝万歳と写し門に立戸に
香を捧跪きて拝ければ此闖王李自成丞相牛金星の従に七宝の兜
を着白馬に跨雑旗錦旗刀鎗に擁れ徐々と歩ませ数百万の軍兵に

方を守りて大明門をさして承天門を望み見自ら弓に矢を打つがひ天
を仰て大きに笑ひ諸軍を顧みて申けるは我今勢山河を席捲遂に
大明を滅しぬ我子孫永く天下を一統せば此箭承天門の額の天の
字に中るべし令皇業を保ち得べき徴とも見よとて引ても放つに箭
天の字の下に中りければ牛金星走り来て大王の箭天下
にあたりければ天下一統し貴き得るの祥也と祝しければ自成大に悦び頗し
会城に入て宴を開き宗族朗人をとじめ二十七日の大明の一齊に万歳
を唱へ都城の娼婦歌唱妓妾上百余人を拿来り酒筵に侍へ歓飲む
天余の猿徳をひくに席を定め深宮大殿に舞曲を作し酩酊して狼に
婦人をしてむ明朝三百年天下の政をなせし正殿をる会門風激怒
を墜しなりてそ湧目ありしかば先々されば城門の外数十万の軍卒東西へ



賊軍集妓婦宴宮中

施し士に衣食を與へ百人の者に八人ハ白銀并羽の花紅と集る馬揃を為し篩乃ハ貴賎の者まで旗物冊翻の鳳を見ほる大なるハ擂をさしてハ善蓮を擂小さきハ油蚕と如き蛇と蛙と余の雅籍ハ見り渡しても知るべし

劉伯温遺圖識

扨も其自賊ハ崇禎帝の行方を知らざりしが若文と変じ崇禎帝を擒へ来る者ハ銀一万両を賞とし侯伯に封ずべしと觸出しける小諸軍草を分て尋ね求むる遂に煤山紅閣の内に崇禎帝の屍を捜り身にハ青色邊白の袷衣を御し髪をさばき面を覆ひ左の足にハ絲履を着右の足ハ赤跣なりし衣襟の中に血書の遺詔あり其辞に曰く

朕自登極十七年逆賊直逼京師雖朕薄徳匪躬上干天咎然皆諸臣之誤朕也朕死無面目見祖宗于地下去朕冠冕以髪覆面任賊分裂朕屍勿傷百姓一人

人〻見てかなしみに彼秘室に籠居し劉伯温が圖識をひらき遠つ代宅に天数の止べからざる事を暁りたる者もありけん帝は皇后の尸骸は宮中を立出自ら縊二豊と出て柳の槐を実出塊を枕として死を遂草の厳を遂て終に之を王に心が随て槐とも其側に至き身死する内官六七人見とあるぞ哀れなりける其國禎外戚徳とい云両人帝の槐に至とり悼く哭し絶へるが百姓も悉く伏して哭した理なるかなとて袂を濡さぬ者もなし

繪本國姓爺忠義傳初篇巻之六終

繪本國姓爺忠義傳初篇巻之七 目録

第一回
忠臣殉死列女死節
費氏刺羅公之図

第二回
呉圭支婦殺賊報怨之図
兩婦殺両賊

第三回
同図
李自成登位

第四回
李自成登位見[illegible]之図
呉三桂為請兵韃靼雪[illegible]

第八回

漁夫海浜獲鷸與蚌之圖

燕摂政王駙呉三桂討李自成之圖

呉三桂斬唐通

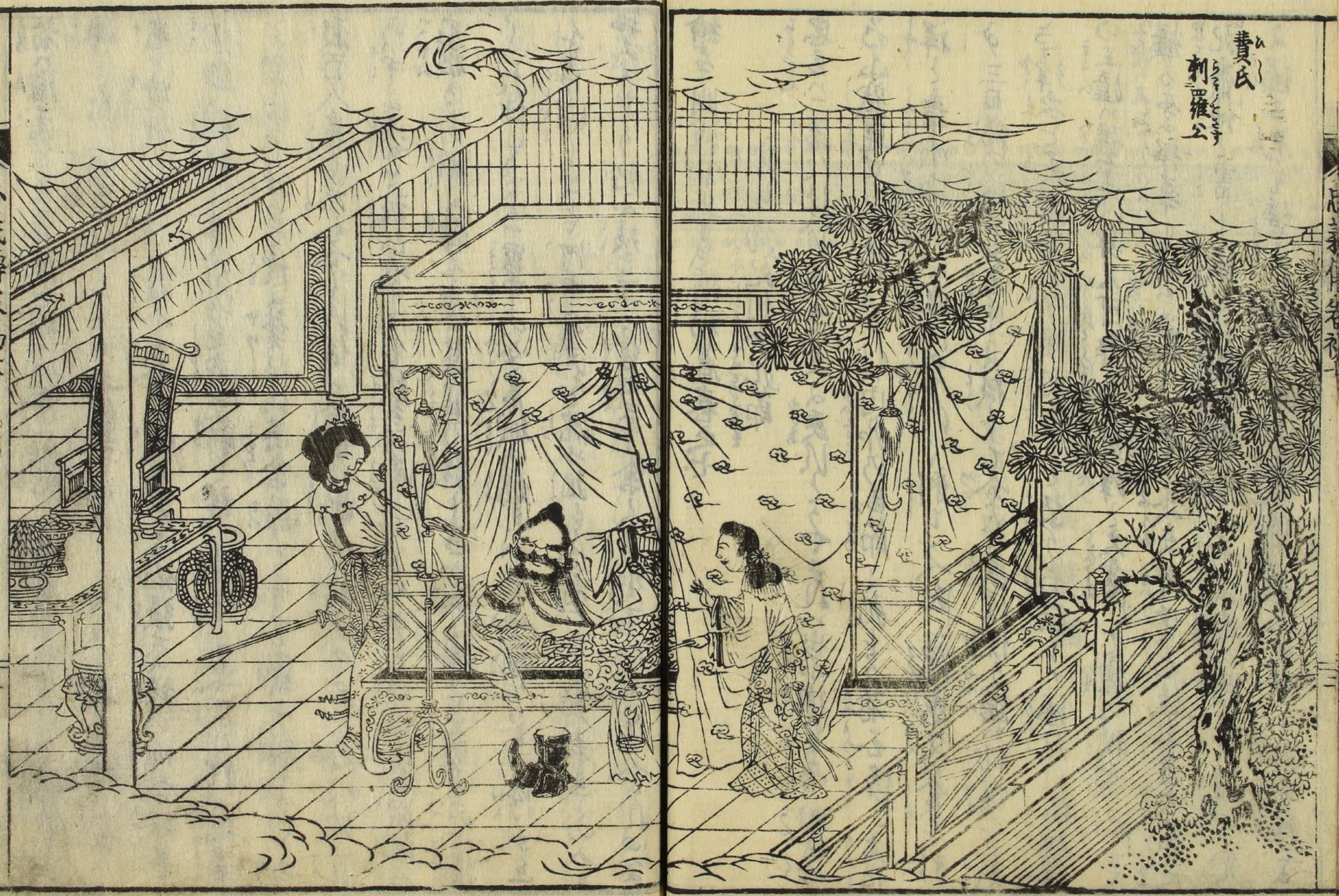
唐通之燕営而説呉三桂之圖

呉三桂斬唐通之圖

繪本国姓爺忠義傳初篇巻之七

忠臣殉死列女死節

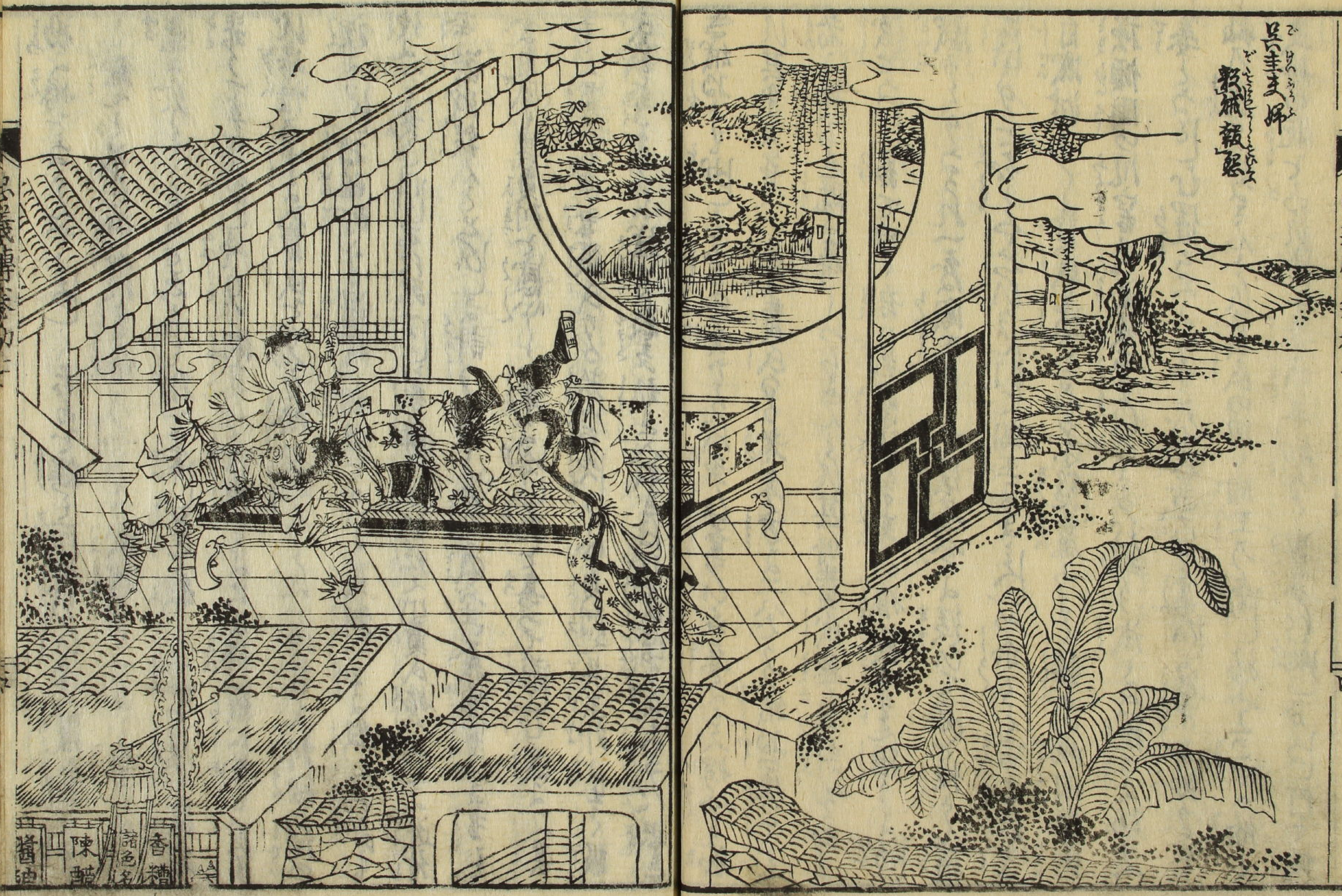
忠臣は二君に仕へず貞女二夫に更ずとかやされば崇禎皇帝国統の為に賊逆せらるゝ後ひたれば内外の臣節に死をる者も多し孟兆祥と章明なる人は正陽門の下にて刺ちがへ死し范景文は食を断こと三日城の端に身を井中に投じて命を落し倪元路は縊帳に縊き衣を着漢壽亭侯関帝を祭り南面して縊死し翰林院の王家彦は壁上に身不可辱志不可降と大書して妻の馬氏と同じく縊る李邦華も壁に題して書く丈夫聖賢の為後忠孝大節之死廉恥と書し縊死し劉理順は妻の萬氏妾の李氏僕従人命に縊る是も壁上に題して曰く三忠祠内無愧前賢之外全□



費氏
刺羅維公

者ハ麻索を冠服を加へ河中に沈る凌義渠ハ自ら頸を掉て相果
縫き死ハ劉文炳ハ大なる井の内へ男女十六人ほく投じ火を放く
宅を焼彼ハ井中へ躍入く命を絶る惠安伯張慶臻の両人ハ紡室を
おらて親族みな家の四方に薪を積く其中に妻子と倶に酒宴
を催し火を放つて倶に焚死ハ其余節を守て義に死ぬるもの
数百人悪く記さんハ係る時世に聞きハ婦人の身え迄に深窓
の中に姿を隠ひ人すらも艶きの美しからんすと求むれ共国乱に
家破るこの期に臨んで其容の麗しきが故に辱を蒙り身を傷
くいたましきぞる宮中の女官嬪の乱を入るとし捕へられて汚されて
人も口惜しとて河中に身を沈め死を除者二百余人表てる
掛ろなり死に後ゑする宮女三千余人哀彼不にてとらへられ心る

き賊ねども也し容の美なる故争ひ集ひ五妾あるハ婢女も誰
ハ其中に第一の美女費氏なる者年方に二八なるが賊羅公に云
者に捕へられ既に辱しめられんとハ其時費氏忽ち一計を出し
欺きて曰く吾ハ是崇禎皇帝の娘長公主也猥りに汚
献るべきなれ一度闖王に申て後其令に従ひて身を任さん羅
公是を聞きやさしひかん割て闖王にまみえしめ奈てと言上ハ李
自成ハ費氏が淑女と見るに眼驚かぬく勅止の幽閉なる何
探傾国の風容是公長公主にあらざる故知り試して羅公に給へ
妻とならしむ羅公大によろこび急ぎ己が集ひ宮中に帰りて
婚の義りとなさんとハ費氏の曰く闖王の免し給ふ上ハ正しく婚礼
ま婦の礼をなれ後し妾未年幼なく男子に触しるなし何ぞ候


呉圭夫婦
彩城報怨
醤油
陳醋
諸名酒
香糟

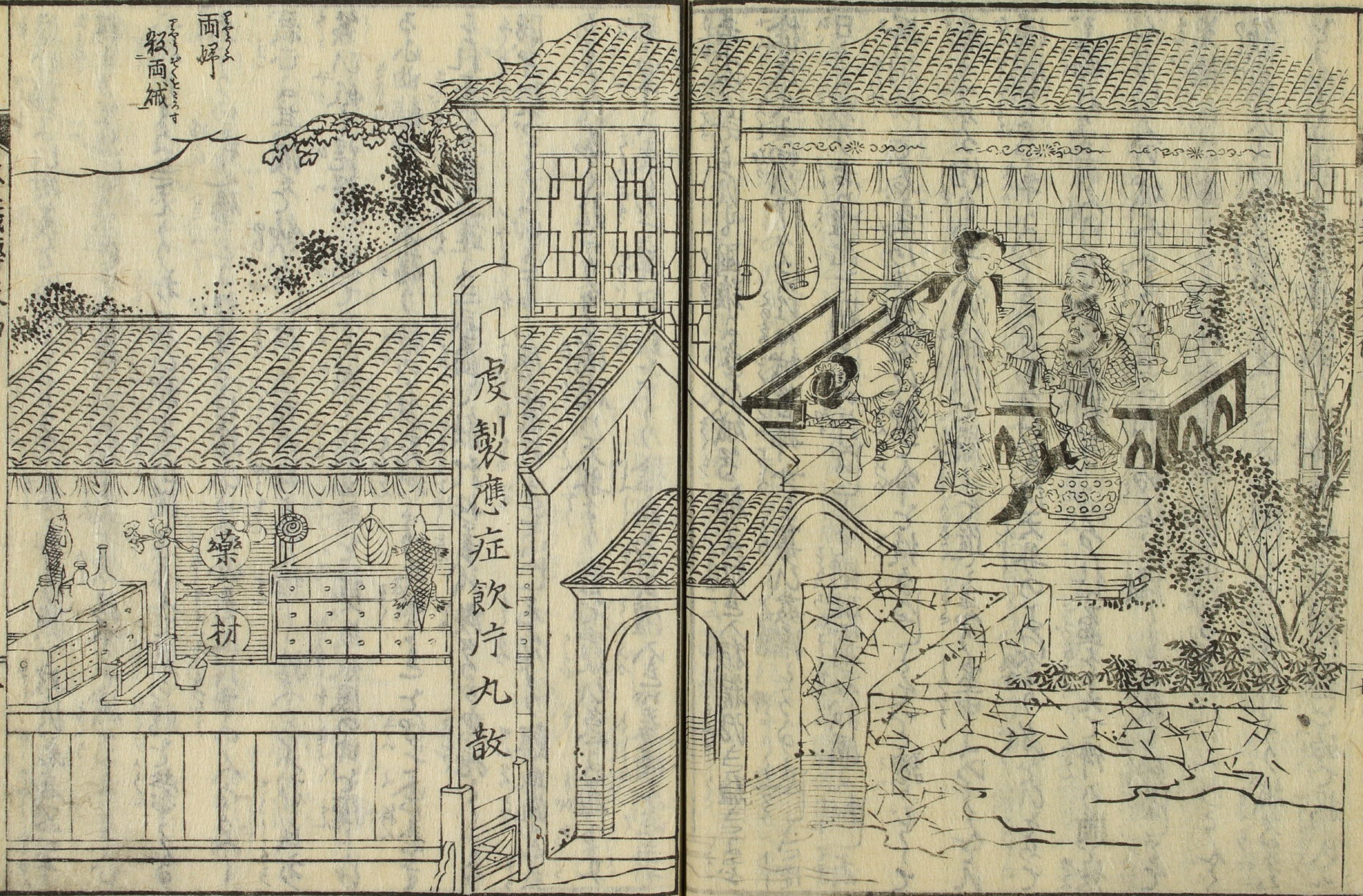
物の婿となさんやと悦しく吉日を撰み而后外ひ孫人羅公是を娶く然とてとひ流石に皇帝の女なる武徳の心てましいなるかと見さしに吉日と忽ちに猪を宰し羊を殺し宴を設く衆賊来りて是を賀し終日の酒宴なりも大よ酔羅公是も寝以房帷の中よ入費氏を呼んで枕を進んとしに此時費氏利剣を袖の裡よりしおし羅賊が咽喉とがいしく突刺一力よ殺し其身も終よ忠と要き同じく死なりし歎称なる斯孫人此費氏始め国王への返村公至く殺んと云ひしよ計つて天下ひ衆よ及ぶ其の義勇男子ふも劣ど李自成を其貞列と感心し士卒よ命じ屍を集めて葬むるよつへ其主と云ひ費人の其妻張氏なる若容貌しく心貞列人是へ主外に出て張氏家にあらうふ賊兵数多乱れ入ぬるとば張氏心中よ大きに恐れ

是にあるる承みの中へ身を隠して忍び居けるに賊等財宝を掠めとり門外へ出行けり張氏夫の兄も死なぬ心地して池の中より這出衣を改め夫の呉奎を呼来んと門戸の辺へ立出しに一人の賊へ来り忽張氏が顔色を見てたく拿へ姦淫をなるの屢くなりし此賊元来酒に酔ぬるよ其後熟く眠りて更に覚ざれば張氏心中深く恨み怒りて如何やせん角や計んと心を苦しむ所へ夫呉奎逃帰りきたりて門を叩く張氏ぬき足して門を開き斯くと物語り姦賊よく睡りていまだ覚ざれば窃して恨をはらさむとて夫婦倶に刀を携ぬ呉奎先賊が咽喉をさし貫けば張氏は剣を震ひすかさず切殺す此賊懐中に若干の金銀を納へたれば呉奎取て是を奪ひ家を棄て夫婦諸共難を避て隣の里へ行く道にして一つの井あり張氏是を見て

きに向ひてハたる貞女ハ二夫にまみえずとかや妾兄に賊の為に身を汚されしが徐氏義を失ハざるの偽る故行んため今既に逃て怒る讒ひぬるひ奔ざる財宝を得たり心持のまゝ宝に鬻して私に帰りて彼等に之を接せんとせし是ハ奎様き抱き止んとする所張氏妻と揚て君王が罪を赦し給ふとも妾何の面目ありて世に立つべきとゝく押開き井の中へ飛のごとく死すりたる是ハ奎をとべき其りて側なる頭と井のうえに引崩し泥を押入て落行たる

両婦殺両賊

汴京の都に真家富の生薬店の名ハ潘鵰と云妻ハ宛平縣の進士が女徐氏妾ハ餘清の妓女揚氏一妻一妾花のごとく殊に似すり揚氏ハ琵琶の秘曲を伝へ雪の朝月の夕氷弦を弾ずるに聞者感じましな今許らずも国難に会ひ賊等都に乱れ入狼藉防ぎ難き所よ徐氏夫に向ひて云るハ此比賊等婦女を奪ひ姦淫するの甚しき由日ゞに聞り君ハ唯死を期するの外なし去ば則砒霜を以酒に和し妾婦相勧して義に従らバ一所に飲て命を絶るに如じとそつと蔵もちて居ける所に二人の賊門を崩して進ミ来り室中にのさんとせし潘鵰驚き卒にかくるべきに有りけれバ天井の上に登り身をひそめてぞ隠れたる両人の女ハ兼て覚期せしなれバ盃をもて件の酒を飲んとせし二人の賊大に喜び娘子酒を酌給ぐ諸ともに我も酌み酌して先徐氏に一盃とらむ徐氏元より死を求める心なれバよろこんで飲盞ルに忽ち面の色変じて身を側して其ま死ぬより賊等是とハ知らで此娘子酒に勝ずまくも酔ぬと打笑ひ又一盃を酌て揚氏に



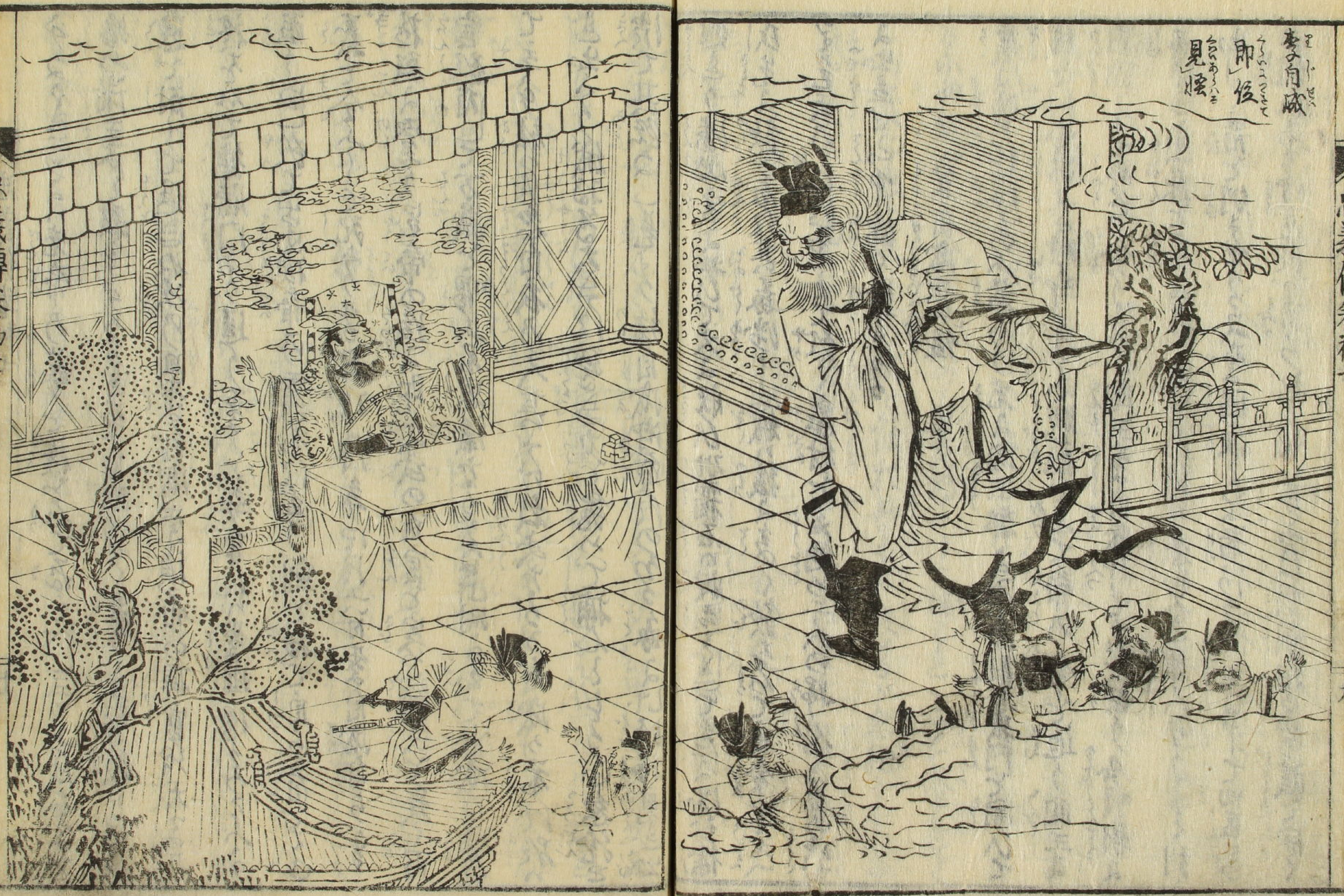
両婦
殺両娥
虔製應症飲片丸散
藥
材

進む楊氏此時笑を催ひてやゝありて妾元より酒を好めば君が軍
情ありて然しき志を捨給ひなば此一盃を飲給へとて賊等にすゝむ
二賊同じくこゝろよげに打笑ひ我等は此酒を呑んで君の情を受んとす
元よりの希ハ楊氏の琵琶を此頃ひけるハ誠に風月中の人なるべし
賊正に其酒を飲ぬと見し楊氏一曲の妙音を弾じ給へかしと楊氏莞
笑ひ軈て琵琶を把て金徽を按へ玉軫を調へ鳳求凰の曲を弾じけ
る小曲韻ゆるやかに揚り歌の声宛轉として二賊こゝろを奪れて余念もな
き盃を重て一連に三の盃を飲れば妙音の竟ぬ程なるが忽ち苦しみ
腹中裂るがごとく面色青く唇紫の色を顕し毛孔より鮮血流れ出て
まもなく死けるを潘鵬ハ天井より是を窺ひ急に飛び下り
羊牢に走り行て羊の血をとり徐氏が口に灌入れば毒酒を吐出て

甦りて潘鵬家に扶ひて大に喜び砒霜石ハ性急にして速に溶む徐
氏先に飲が故に其毒浅し二賊ハ後に多く飲たるにて自命を失へ
り是天の冥罰として軈て家財を取納め二人の婦人も男の姿
に出立せしめ山中深く遁れける

李自成登位

爰に曹化淳といふ者あり先に闖王都に入し時彰義門を開ひて
賊を引入いまだ時至らざるに物の犧を上て帝の命を迫り闖王に
内通して賞を貪りけるに闖王李自成却て是を怒り汝明朝に
忠して国恩を忘れたり其悪を顧ずや悪むべき罪人なりとて引
出して首を刎させけるに李闖王の者たり闖王ハやがて四臣三ッ
の敵ひあり今日ハ自ら死を望し一ツハ大明朝祖宗の陵を開く



李自成即位見妖

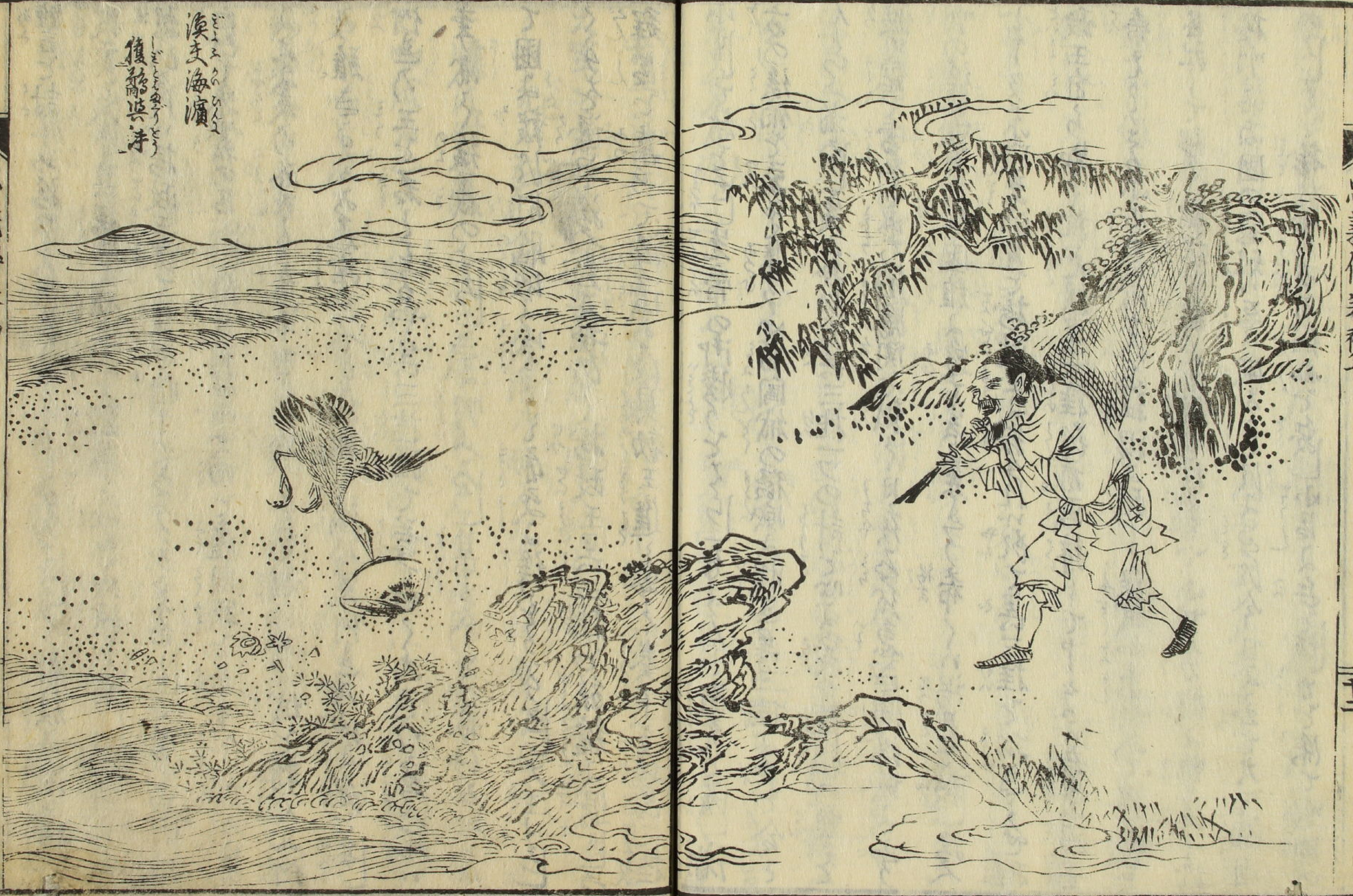
かゝるうへ二ツよハ先帝乃葬を礼をもて為るべし三ツよハ去るを
始め諸王子を殺さんとするもの李自成に従く悉く是を赦し国須
恩を謝して退きぬ次の日李自成崇禎帝の梓宮を天子乃
礼をもて徳勝門より送り厚く葬されバ李国禎よろこぶ事
限りなし既て崇禎帝の霊前にて剣を抜て自ら首を刎
義を全ふして死す去る程に同年四月六日李自成自ら皇
極殿に登り皇帝の位に即文武の百官を定め朝賀を受く百
官拝首して万歳と唱ふ不思議なるかな此時にあたつて自成目眩き
て立る能ハず忽白衣の人甚だけ数丈なるが自成が前に跪れ
出さう然ねる時大きに驚き力を定めて捕んとするに忽然と
消て其跡なし是より後自成御座にのぼる毎に此妖物見えし也

自成剣を抜て斬んとすれば陽炎のごとく失て留る所を知ず又
なし是を懐と思ひ居るに宝璽を懐とせしむるに其ハ文理気を
て見えぬ是永昌の銅銭を鋳るに是も文字いさゝか後に録付を
鋳出せしも更に分明ならざるなし宋軍師牛金星不祥を見て
李が氏の滅んずと等しく悲り疏を作つて諫めけれども更に聞ず
始よりのむしめより種々の凶変見ゆるは帝王乃器あらず
始め登位するより先に堯舜の仁をもて其民を愛し大禹湯の
徳を作て天地に施し始めて百姓帝王の徳と潤ひ国家永く絶
世に伝ふ然るに事始より荒暴の行ひあれバ天地の神明是を罰し
急速んの有ことなくしてまたく此に誅戮せられて自成是を聞しかども
此日夜宮中に美女を集め婬を恣に荒淫し酒に耽りて罪なき臣を

殺し玉ひ帝を寵めては百姓を虐げ悪行日々に募りければ心ある
人々は李氏の滅亡近きにありと危ぶまぬ者もなし

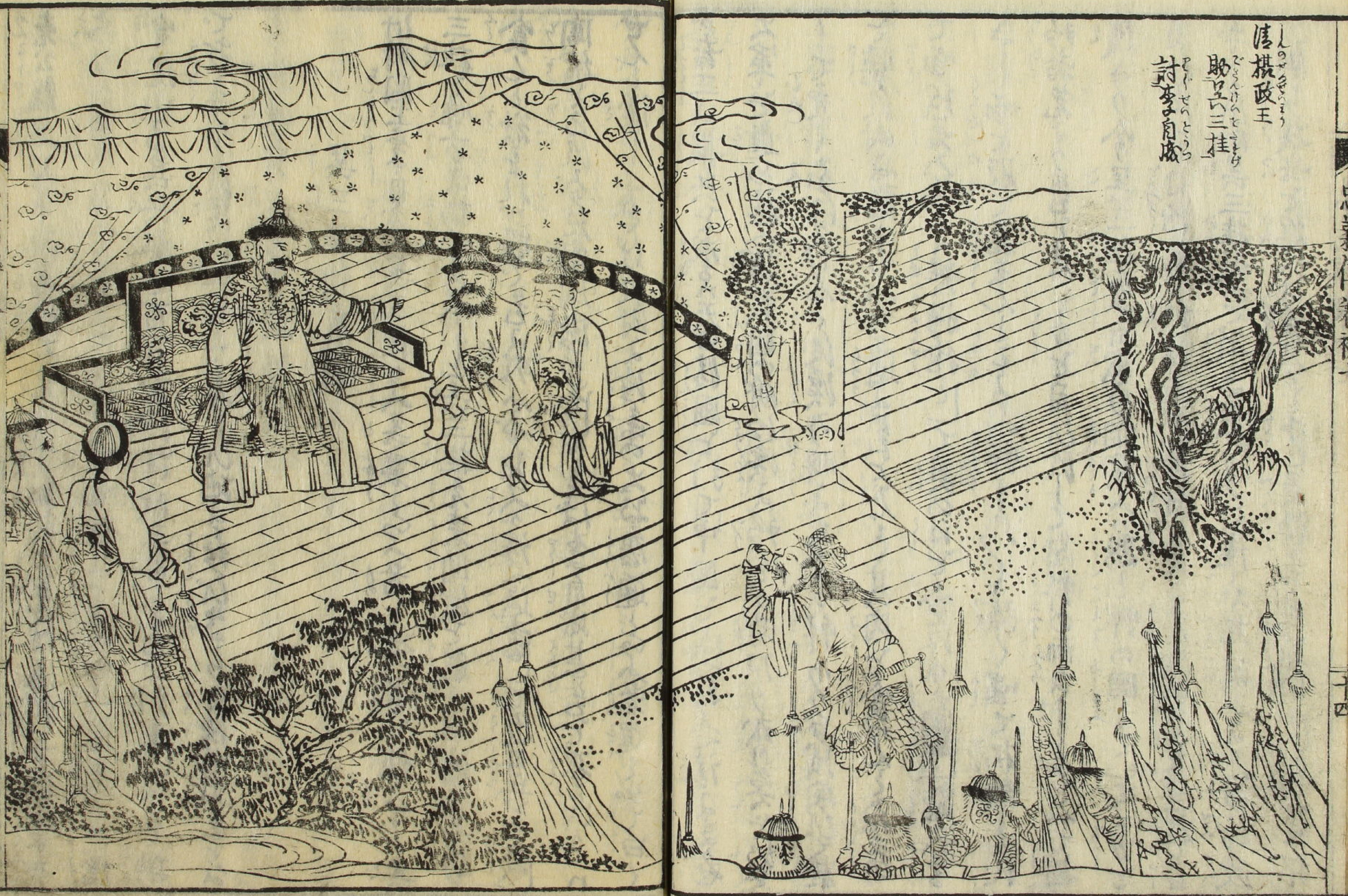
呉三桂為請兵韃靼雪讐

遼東の總兵呉三桂は三十万の勢を発し韃靼の防ぎとて遼の
地（撫順）にありしが李自成乱を起すと聞てより去月呉三桂とも都
へ（京）へ登らんとするに三桂軍勢をまとめ北京をさして登んとしけるに
ども闖賊内に這り関々の往来も心ならず日を過しけるに
三月の季に至り闖賊北京を陥れ崇禎帝賊の為に崩御し
給ひぬと聞えければ呉三桂甚だ驚き一時に北京へ押通り怨を報ぜ
過しと議すれども流石大事の事なれば足を留めて三十万の軍兵ありといへども
而も今は僅に二万余りなれば呉三桂黙念たるを待すべからず
小児して賊を亡し先帝の御憤りをはらし奉らんと檄文を廻し諸
方の侯伯を募り集めるに皆闖賊の猛威に懼れ呉三桂に力を合さ
んといふ者なし終に一ツの計を心に定め韃靼の勢を
假て怨を雪んと思ひ山海関を越て日夜を分ず急ぎ瀋陽城に至り
明の總兵呉三桂国難に逢て此に来る希くは謁見を乞ふ
とかや名乗に門吏此旨を摂政王に告ければ軈て呉三桂を招き寄せ摂
政王自ら出て相見ければ呉三桂頓首再拝して申けるは吾崇禎皇
帝えらざるに李自成が為に社稷に死し衆賊北京に入て国を乱せ
臣死して以て国怨を報んと欲すれども如何せん力微にして勢足らず況
哉明は清国の寇乱は互に風を示して今日に至て大王隣国
のよしみを捨ず寛太の仁恕を発し小臣に兵を借し力を添て明国の


漁夫海濱
獲鷸與蚌

悪言と詐しめ給ハ大恩永く忘るまじく親族の罪を赦ざれ
貢を入て其徳を謝さんと肝膽を吐き血涙を流し涕泣して
訴ひければ摂政王聞て良思惟してありけるが莞爾として答て曰明國
亡びて忠義の臣なし独呉三桂が軍大功を遂國冠を再びんと計る実
まことに其の志なり吾軍勢を発し是を援けるが賊を斬んに何
の難き事かあらん然とも功成て後ハ軍何ぞの地に身を安し
何ぞの王を君とするや呉三桂泣て答て曰く大王の宣ふ所ハ
事成て後義のよろしきに随ひ候へし某が今日に於ける死をも
て國に報ハ肝脳地に塗とも永く辞せざる所なりと大王まし
くかく議て後呉に於ひて摂政王呉三桂を旅館に退らしめ
群臣を集めて評議あれハ貝勒王進み出て奏しけるハ呉三桂

が吾王に援兵を求るハ天の清國を引て中國を奪へ給ふ之徳にまかせ
大軍を進め給へ昔戦國の時に漢に鷸といふ者あり或日矣を好
して食に飢へらんとし溪の畔に大なる蚌あり口を開ひて鷸
を曝し陽に鷸といふ鳥遥に是を見て其肉を食んと飛来り
て啄ばんとするに蚌将然として貝の口を合せ鷸の嘴を挟む
きて啄を脱て飛去んとするに蚌まれて強く噛て相離さん
為鷸先より是を見て力を用ひずして鷸蚌の両ながらを取て捕
獲たり今呉三桂李自成の相戦ふハ鷸と蚌の闘ひにして大王力を
用ひずして自然是を給ふべし摂政王大に喜び翌日呉三桂を召
出されけり呉三桂髪を抜き着をとりけ謹で摂政王に見へ摂政
王則ち援兵を揃への有令を下し貝勒王を惣軍師とし副ね軍邪

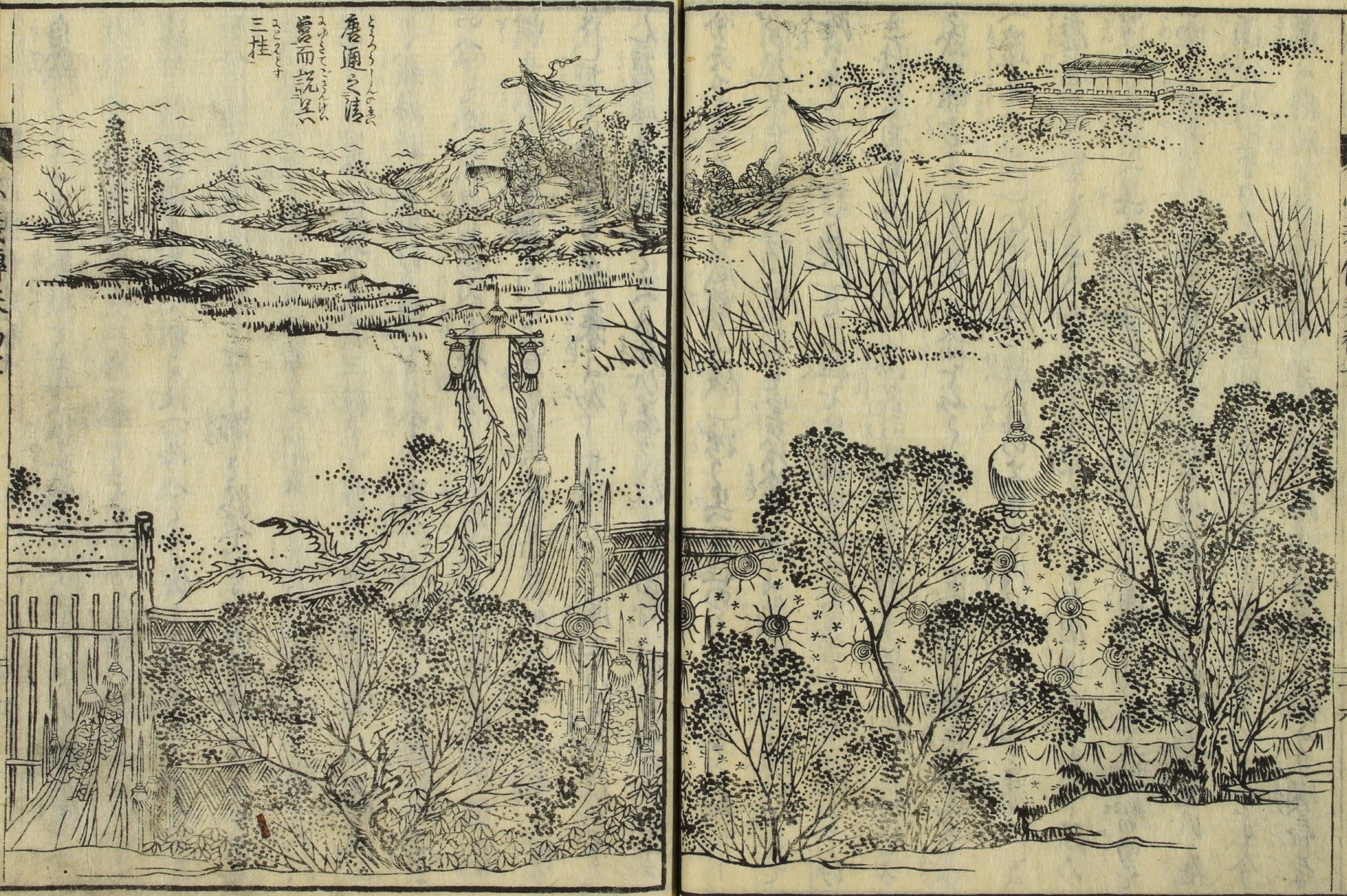

清摂政王
助呉三桂
討李自成

先公龍虎将軍附馬都尉右先鋒丁知貂。左先鋒海利王右監軍安
大人左監軍烏金王をはじめとし嘘嘞。跳子。丁黒山。馬徳光王。尭虎
金虎山等其兵ハ都て百万余騎摂政王自ら是を率ゐ日を撰
ておさ／＼呉三桂ハよろこび地に打ひれふし出陣の用意をな
し摂政王の命令を相待る

呉三桂斬唐通

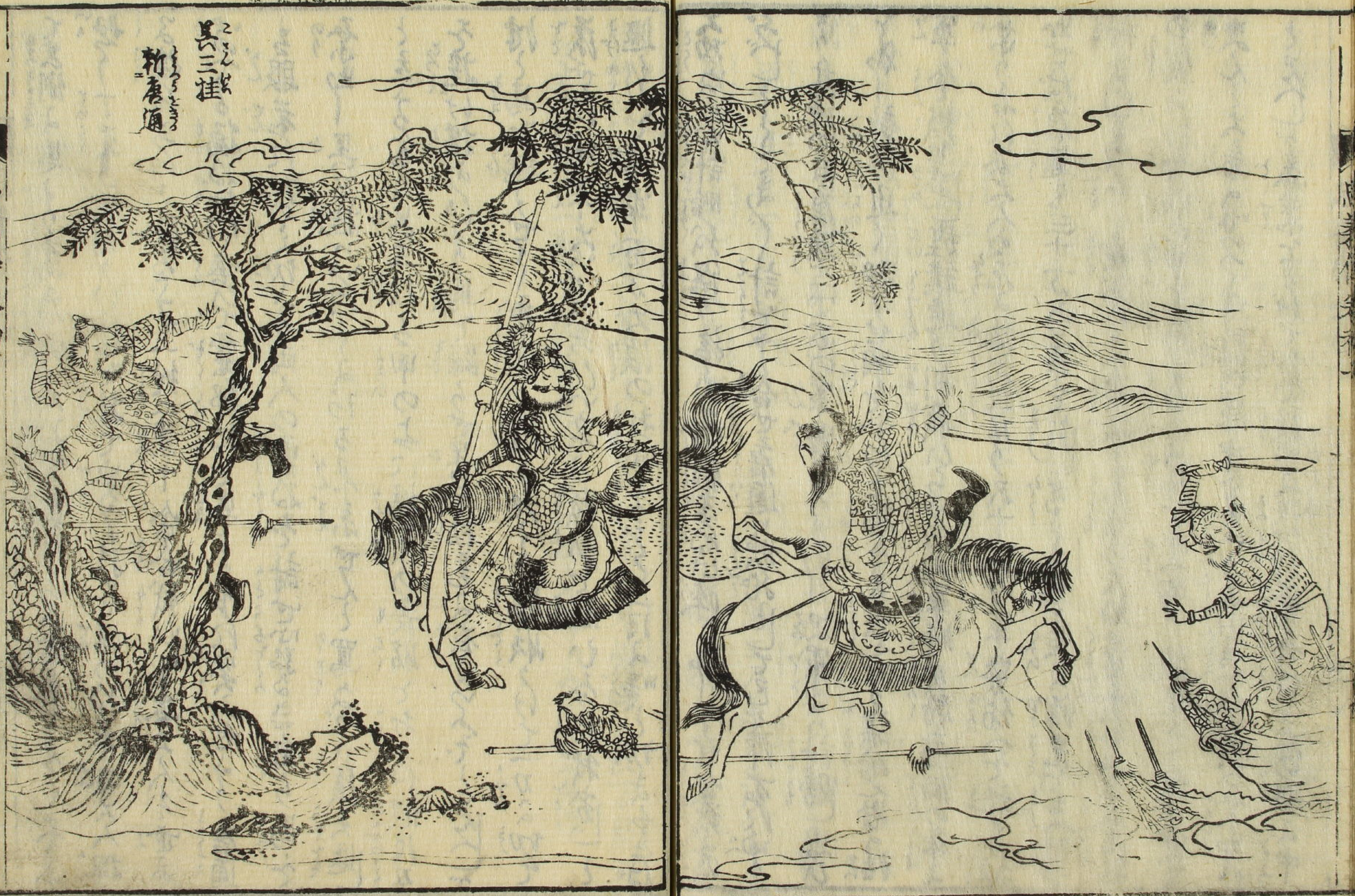
此時闖王李自成ハ呉三桂が父呉襄をして書を作らせて呉
三桂を味方に招くといへども呉三桂元来闖賊を悪む事深く其肉を
食んと欲すれバ何ぞ是に従ふべき父が手紙へ返書して近日兵を発し
闖賊を亡ぼし父が仇を報ぜん旨を書送りけれバ李自成甚是を恐れいかゞ
せんと議しけれバ附に降参の大将唐通といふ者進み出て曰く

今天下悉く君の威勢に服し独り呉三桂のミ何の力もなく敵対
なすハ其罪を知て頑ハ渠が心を害ふ捨て利に就べし若迷ひとられて
従ハずんバ大兵を発して三桂を生捕国家の大患を除くべしと申け
れバ李自成大によろこび汝が計極めて妙なり呉三桂を擒にする
の義ハ味方に招き来らバ偽を以て候伯となすべしとて精兵ハ三十万とて
遼東へ押行しむ此時呉三桂ハ清の大軍を催し山海関を手堅く守りしに
唐通が軍勢も寅に至り又十里隔て陣を取唐通自ら数十騎の
逞兵を従へ呉三桂が営に来り姓名を以て通しければ呉三桂智勇を
兼し名ある人なれバ唐通が計略を推察し招き入て対面し唐
通謹んで申けるハ将軍辺関に在て功多く名大なりといへども今
既に国破れ君亡び将く身を隠し終への地なきに似たり順帝李


唐通之陣
營而説呉ハ
三桂

自古より英雄と尊ぶ堯舜帝の仁によるといへども頗る湯武
の徳あり我軍の大名我湯慕をうるの宛も泰山北斗のごとし一人
給ふぐ侯傲高大宣光朝に仕へ給ふごとく微ゝたる者なりんや宴
きなして先にある大人書とよせて給ふ給人ども一旦の義によりて志さ
ずひ給ふに某再び宴に来りて我軍に若ん我軍自ら利と不利
ことよく察し給へと云呉三桂是を受て帳に面を和らげ君が詞よ
く我勝将と貫けり謹で高命に随ひ降参して忠を励むべし然と
いへども今我清国の因となる又ま軍中にありて迎へらんには
惜し明日公軍勢を引て此営を責給へ某其時後軍より辛に敵り
さし挟で清軍百万を奪に如し其功をもて周王乃忠臣になつかう
ん唐通是を悦と大に喜び若うく此ごとく為時は我も又是によろこぶる

大功なし又計略を得ば給ふに明朝を此陣に押よせ合戦に及
ぶべしとかくて又計を申合せ唐通は微兆として己が陣へ帰り
ぬ其次の日唐通三十万の軍勢をくり出し又軍に計勝と思ひ
を押し敵陣近く押よせ関をどつと揚るは是ぞ謀略の術の清
軍令鼓を鳴し旌旗連り剣戟ひらめき大軍師貝勒王一騎の乗に
乗りおれ安大人が左に瀋利王なり又十万の軍勢備へを乱さん押
出せば唐通も三十万乃軍を統し気るく進と互に鋒先を争ひ討つ
討たれ半斗も戦ふうち唐通が先手の大将営安谷壮士金龍
の麾に紅白緞の甲を着し真先に馬を乗出し誰か出て我と戦を
決せんと大音に呼はる清の軍中より丁黒山馬を陣頭へ乗出し
と名乗りが轟業をとげて切て放つに誤ず営安谷が左の眼に中


呉三桂
斬唐通

て真逆に馬より落る唐通が太ね粟鄭仁ひろつて番是を見るく太きに
怒り丁寧を振廻し槍を捨て突かゝる是を清の将軍安太人捍
ぎ後へ跳ちかくる程ぞ一騎二来十余合戦ひしが安太人も世に
聞へたる猛将也喚て粟鄭仁を馬より下に突落せし唐通
も眼前にたのもしき切ける両人の勇将を討せ心詞きき自ら馬を
乗出し呉三桂に向ひくみつける見参せんと罵るが後矣退し
とするを見て呉三桂は甲の上に縞素の喪服をうちかけ偃月刀
を提げ横あひより馬を躍らせ呉三桂是に在ぞと名のりしが
津と馬を趣よせて唐通が肩さきより脇腹かけて一刀に切て
落せば賊軍大ねに驚ひいつぞら戦ひを励む者我劣じと
逃行を清軍百万大浪のおしよせるがごとく一同に噇と切まくれば
賊兵討るゝ者挙て算ふべからず逃のびる兵卒僅に五六万騎乃
ちりぢりに皆をさへ都をさして走りゆけり扨りけりみなさまなり

繪本國姓爺忠義傳後編巻之七終

繪本國姓爺忠義傳後篇巻之八　目録

第一回　李自成為餅令狼遷西蜀

円図

呉三桂大破李自成

第二回　呉三桂馳清軍破闖賊之図

扒山之陣破賊軍

第三回　牛金星兵伏帷幕内殺李巌兄弟之図

呉将軍出扒山陣之図

呉三桂討劉宗文之図

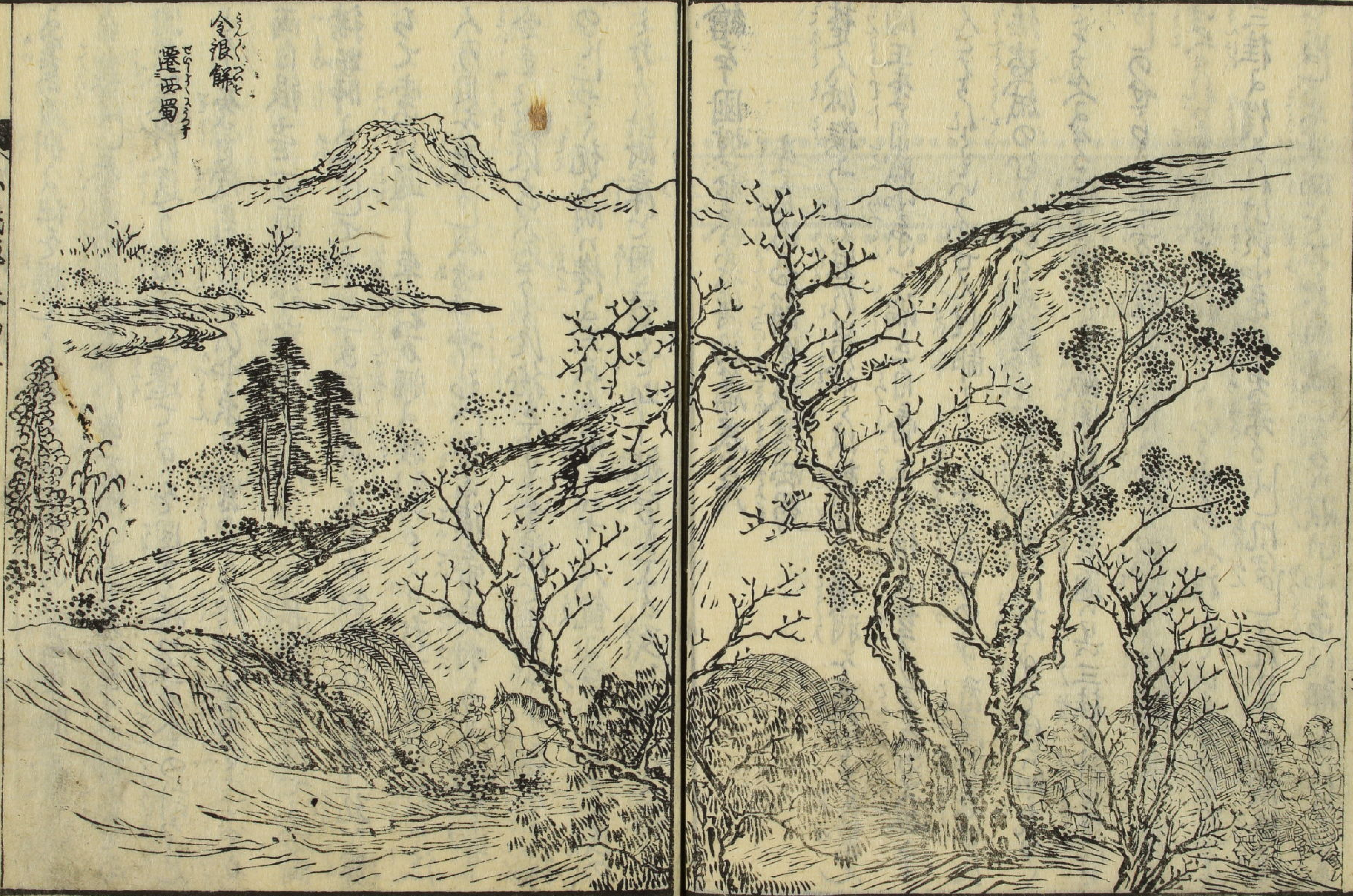
青芳記図

李自成死羅公山
羅睺星帰天之図
宋猴児與薬而害端之図
湖州之民囚李自成之図
神霊討賊之図

繪本國姓爺忠義傳初篇巻之八

李自成為餘令狼遷西蜀

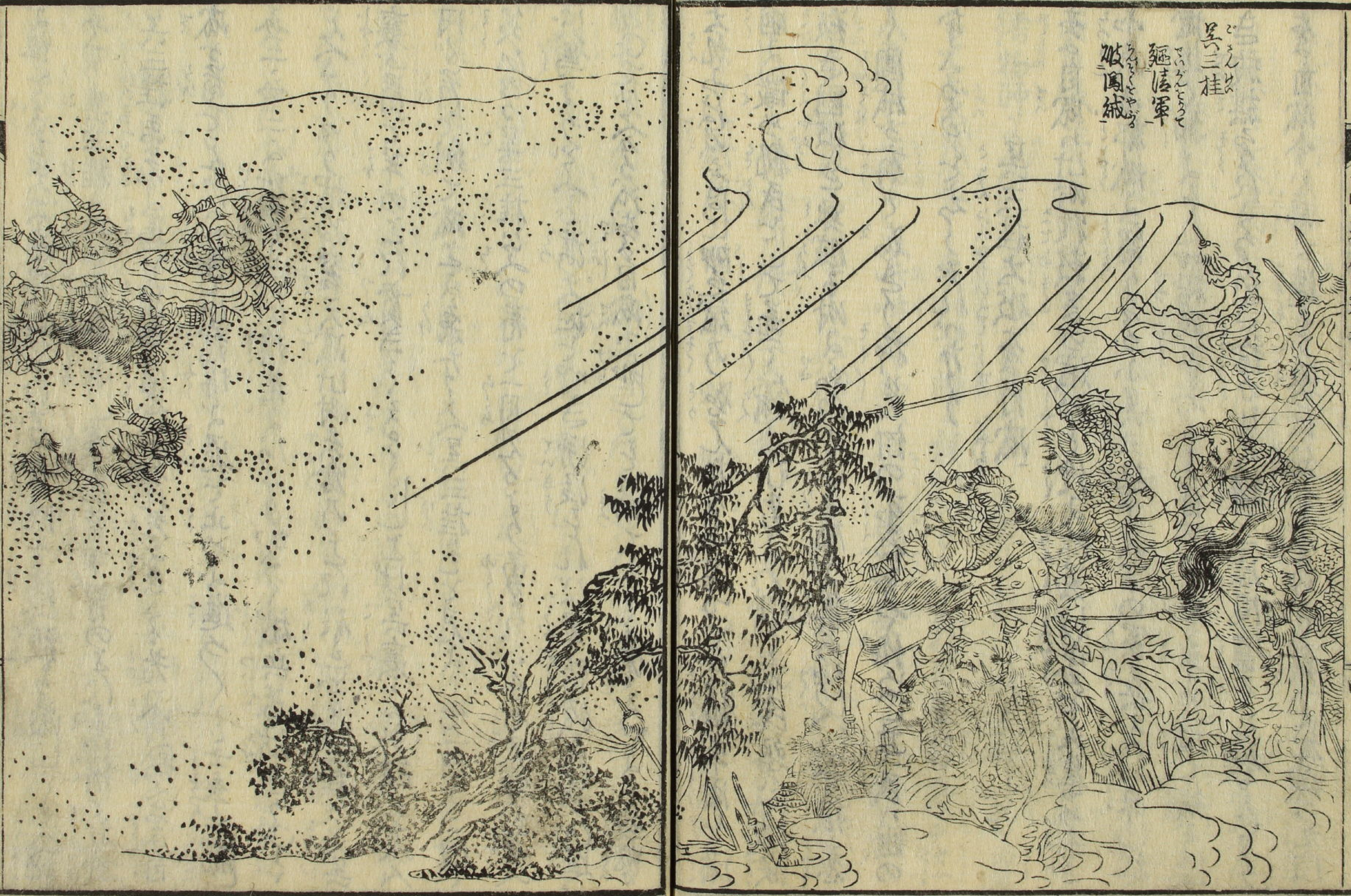
楚人沐猴而冠乃果然とは韓生が項羽を譏せる言葉也闖王李自成北京を陥き自帝王乃位に登り万民の父母たらんと欲すれどもいかにせん性鄙しく心姦邪の者なり首尾相應ぜば賊黨賊のむれしのミ悉幕ミ金殿玉座に政事を定れ佩氣なくこそ入ぬなる係る所しも山海関に戦し唐通ハ呉三桂が計略におちしのせらる三十万の精兵を従ふ命を彼地に落し敗走を退く都に突入られバ李自成大に驚きこれいかにかふを拾てそ清軍百万呉三桂に従へれけバ北京に来なるよし風聞ありければ李自成弥猴と心宋軍師を招く商議しるるれ殿け北京に都あれバ大業


金銀餅を
遷西蜀

に害あり別に地を撰んで遷んはいかにと宋軍師答て此計
る甚よし秦関の固め天下に並ぶ所なし大王先宮中の財宝をあ
つめ西秦に送り彼所に遷て事を図り給へ万全の計なりん
と李自成是に従ひ北京の宮中に納し黄金三千万
両白銀壱万両其外官員民間より取集めし金銀七千万両
鋳物師に命じて重さ一千両づゝの大なる餅の形に鋳し孔を穿
ちて索を通し車数万輌に積引つゝ数百里駿馬の法
人の目を驚かしぬ嗚呼惜むべし崇禎帝英明なりしが倹を守り
金を班ちて施さゞりし故至るまでも金銀を畜むるの吝なり賊
の利しかく来る附は後に三人に若くは十人飢に労してる民の
ことなり此府庫を開き金を出し彼労れたる民を救ひ給ふならば
大乱に及ばじ加之賊の盛んなるに当つて兵粮軍用を諸
国に徴め飢民をして益々饑しむ是によりて万民怨て諸候
叛き国破れ身滅る附に今府庫に集め給ひし金銀悉
く闖賊が有となりて抑是何の為ぞや絶ては其民は国の
本なることを志らざればなり

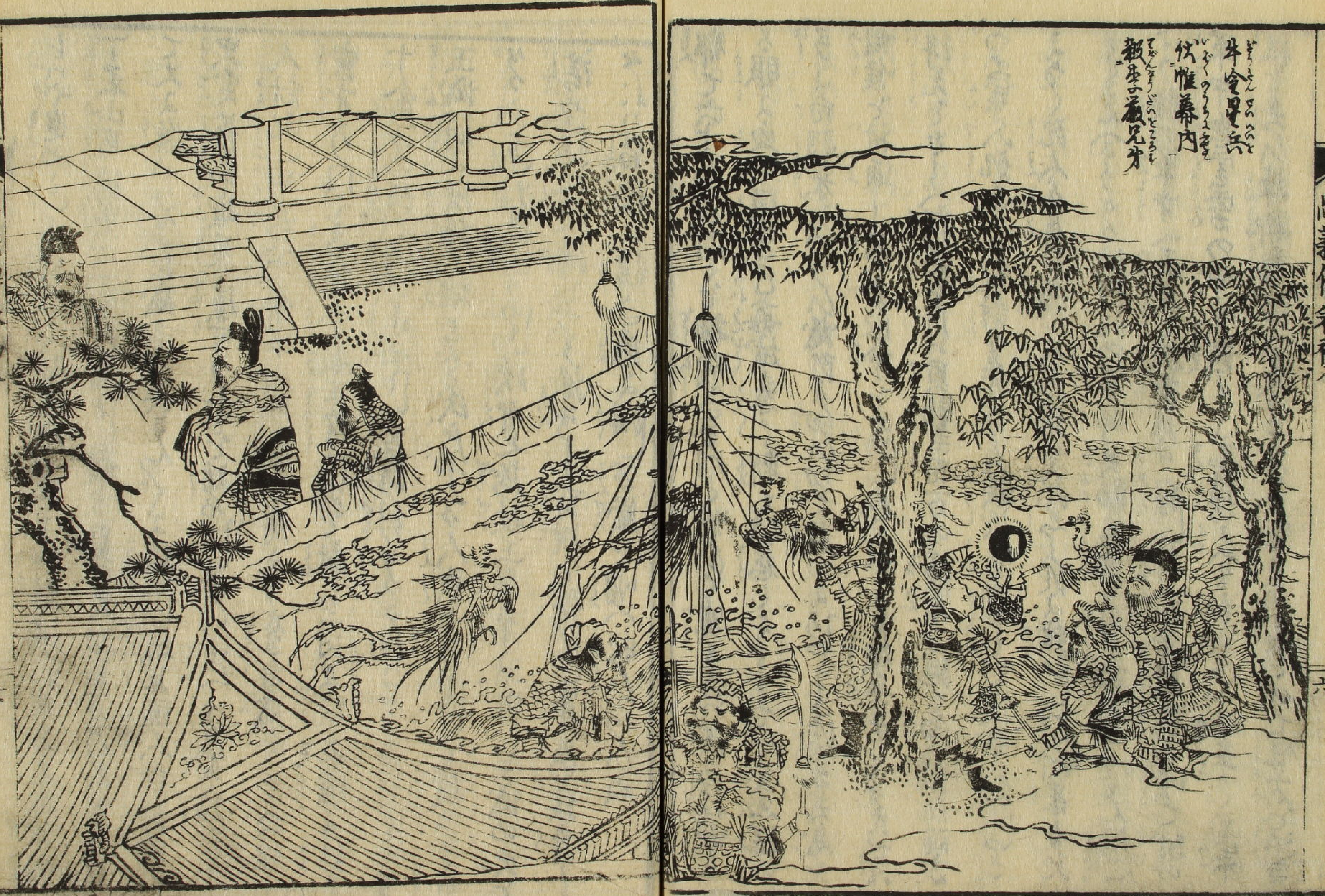
呉三桂大破二李自成一

李自成は此附に数多の賊ねと倶に珍器財宝を取集め未だ
北京の都城に留りけるに呉三桂十五万の軍兵を引率し都
城近く押よせれば摂政王もつゞいて百万の軍卒を随て後に続
き旌旗空にひるがへし鎗刀日に耀き威風凛々と攻よせけり
李自成今は急に退くに及ばず隊伍を定めて戦へと都城の九門


呉三桂
延清軍
破闖賊

に勢をなちち天木大石ハ投うけ弓ゆ鏡を揃べ放ち厳しく支へ戦
ふなり呉ハ三桂が兵ハ國義と號し軍兵皆甲冑のうへに素絹を打掛
呉ハ三桂其先に馬を馳出し忠をなし義に在る者ハ禽獣之身を自
滅が首をうんぜれ拵て此戦場に屍を止るに進べくと士卒を励
ませ二ませ三に攻登りけれバ此鋒先にたへずかくて賊兵の防ぎかたく
見へたりける賊ね容天成此附矢倉のうへに顕れ出呉ハ三桂が父呉
襄が首を竿のうへに貫きてゐるくさしあげ呉ハ襄が家族三十八人
うく首を列て城上に並ゑたりべ呉ハ三桂是を見よとて一同に声を
発ひける呉三桂ハ父の首を一目見るより勇気も挫け力労も失へ
バ馬よりどふど落大地を叩き涕泣すれバ一軍皆涙にむせび進
み兼てうんへる所李自成下知してそれ切て出ぐ鏖にせよと揔勢

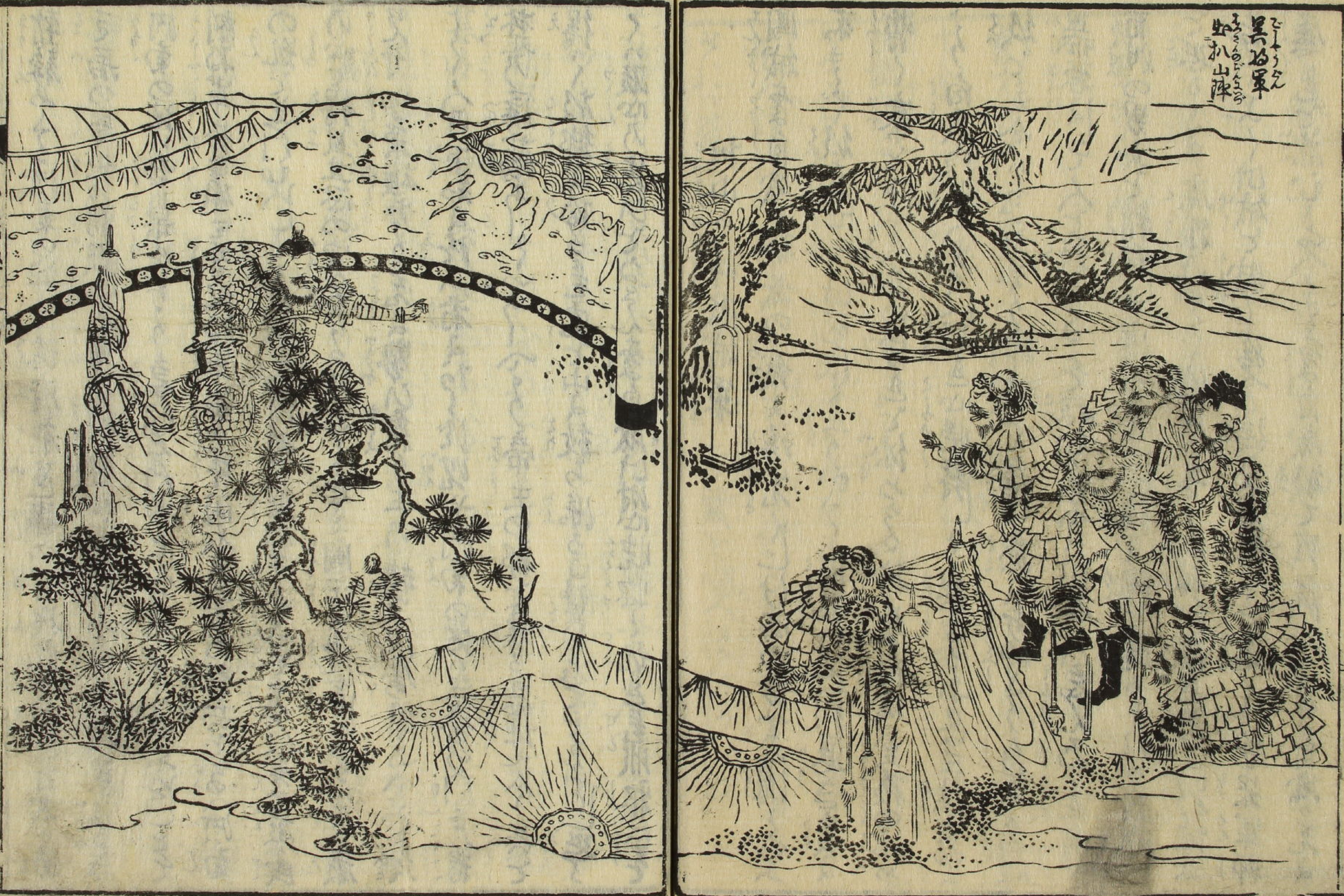
都て六十余万門々を押開き声を喚ひて突出けれバ呉ハ三桂怒れ
る眼に血を灑ぎ己が姦賊悉く斬て此怨をはらさでやと黒漆の
弓に白羽箭をつがひ城を向ひ切て放つにはやまさしく容天成が
咽喉を射通し只一矢に命を落しぬさしもの賊兵ハ是を見てせん
鋒先をたゆべ殺到をたれバ貝勒王百万の清軍を驅て向へ戦ひ両方
の大軍入乱て戦討する声天を轟し互ひに傷つくも後卒散への
まうく死人手負を踏こへ飛越生死をしらず戦ひしハ目出度な
ともうんぞりたる此附清の軍師貝勒王兼て用意やなりたる風上
より賊の軍中へ石灰を投散しける折節地風荒く吹て賊の
軍中忽雲霧の中に戦ふごく前後の見へわかず賊兵ハね乗るも軍
法を失ひ陣脚動ひて見へける所貝勒王羽扇をもつて味方を招き


斗金星兵
伏帷幕内
殺牛二蔵兄弟

是れや進めとて互に顔をさし合せ張馬鉄丁知彰海利王安夫人嗟歎
丁思山馬徳光等と共に数十員の大将百万の大軍を率ゐ
て大に進めハ李自成が軍兵さん〴〵に敗北し賊ハ闖人訓諸綱紀
史実蔡本雄等廉可らんど好めとし世に安へる軍兵数十
人討取し甲兵二十余万人の首を得たり李自成今ハ支へ難く
宮中乃門々ある楼金殿玉字に火を放ち一日に焼立煙に紛れ
十余万の兵にて終に山西をさして落行ぬるされバ其火為に延るも
王城一時に灰燼と焼けり民戸十万人民七万覆しく焼亡ぬ
るこそいたましけれ次第に摂政王兵卒に命じ王城の火を
揉め焼残りし陣とつゐ孫に百姓を憐んで軍民を撫育し
されバ皆徳の懐き恩に浴し万歳を唱へ悦びあへりぬ

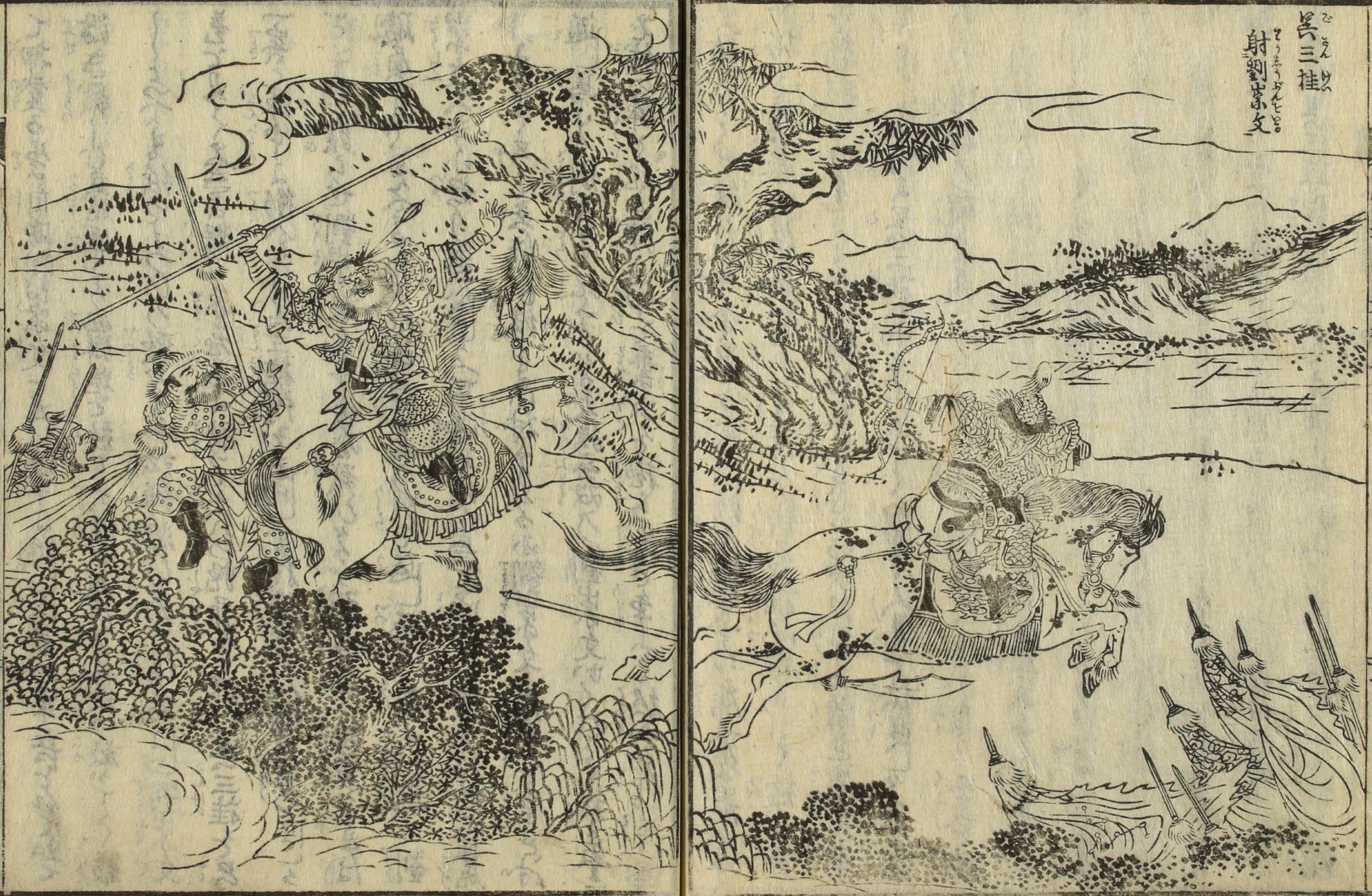
扒山乞陣破賊軍

闖賊李自成ハ都城の一戦に拜先くじけ西の方慈溝とふ
所まで敗走せしが此所にも止りがたく固安の地へ引退き爰に
暫く寨を作し人馬の労を休めける抑李自成登極の始め
より白衣の婦人出て照心悩労し楽ざる所以三挂が為に
殺されたる今ハ気ふさがり非徒なく病の床に打臥し自成之を惟
暴悪ハして人を殺すを好むが為に此病に忘んるとて日々
百姓の男女を斬殺して酒の肴とし僅に悩を遣るされバ百姓是
を恐るゝ事虎狼の如く他国へ走り山林に隠れ天に祈り地に
告て只管此賊を滅し給へと祈る事深し遠く安西宋軍師
劉基を遣むとて乞ども李自成殺て明の臣の附に李自成が先に


呉為軍

斬静める河南の進帰徳府鹿邑縣の百姓乱を起し自成が留
守居の守将を斬殺し其勢ひ漸盛んにして李自成甚驚き
河南の地は皆崇禎に心を寄せ急に走れ何とも言んが為する事及ぶ是にして
制ん為に李巌を召して李自成牛金星李巌両人に三万の精兵を与へ河南
の乱を定めんとす時に牛金星は今時に李巌の民
乃心を得且其心の寛大なるを忌み悪み闖王に讒言しければ李巌
は元来旧来雄なりしを勢ひ殺り王の旗下に属さんとするも久
しく人の下に立つ者にあらず況や河南の地は三秦の門戸晋
楚の藩籬にして帝王の都を建る要地なれば今兵を
得て故郷に帰る是虎を山に放ち添るに翼を以てするが如し恐
くは腹心の患ひとなるべし李自成は此心惑し乱を起す邪臣を

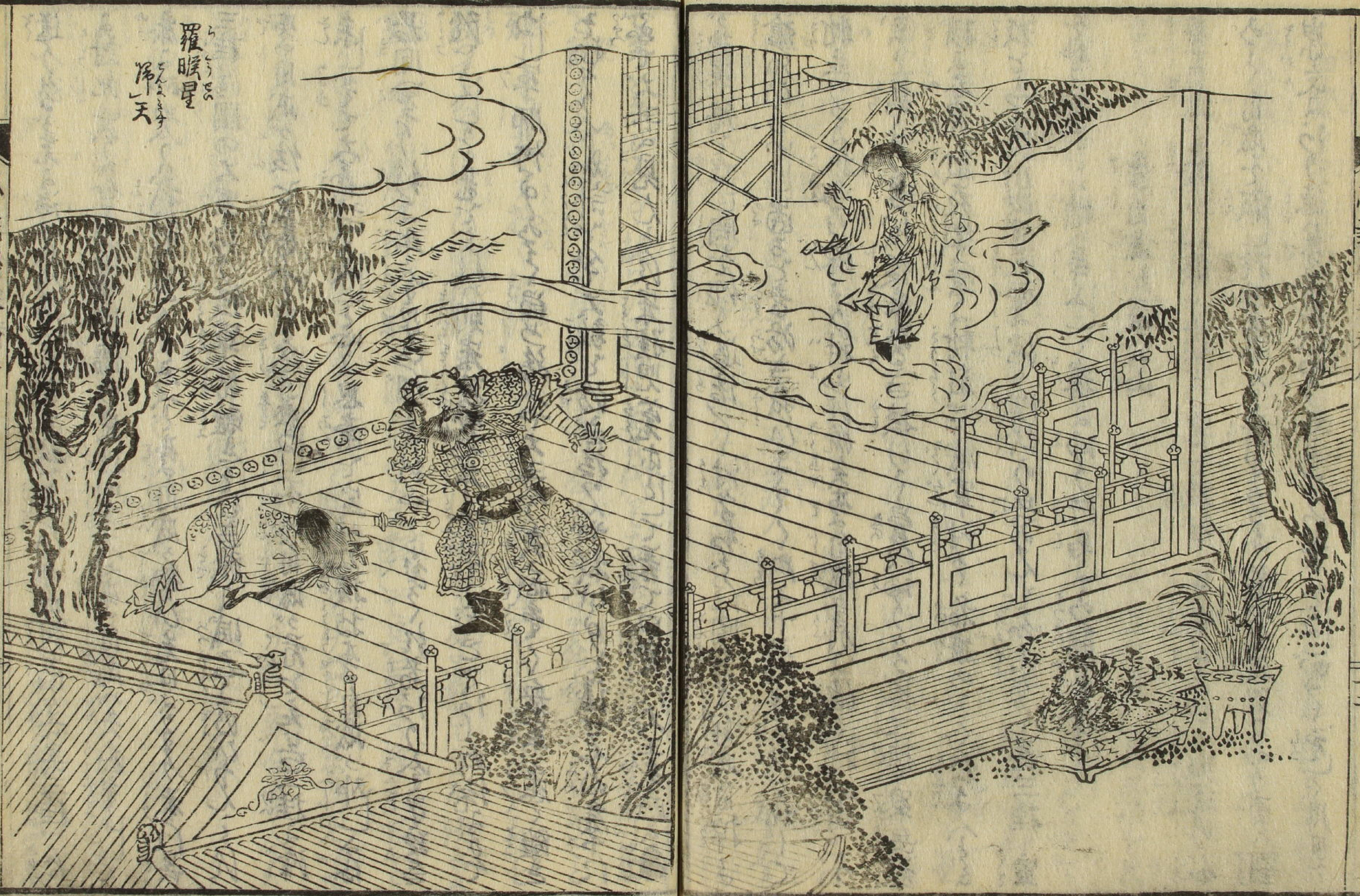
遂に断ずるに難かりしに牛金星が言に随ひ酒宴の席へ李巌が来り
と招き帷幕の後に数百の選兵を伏置き相図を以て終に李巌
を斬殺せり是よりして賊ね互に疑心を抱いて軍士離れ背く者
甚多し去程に呉三桂は北京に入て将々人馬を休息しける所に賊
の腹病は乃醒ざる内に追討して根を断つべしとて自ら三万を率
し猛虎九山と號せし一隊の甲軍と制し其後は選兵又各人皆虎の法
を以て渡りを上に紙の纏乃綿条に飛ぶ風にて奮ひかけ為し旅
て本軍に進むも其を待つ数を持ることは為る纏の弘丸と防ぐの隊
なり呉三桂軍伍既に定りしかば其勢凡十又一万余騎蓋溝乃地へ
押よせたり李自成是を見て大に怒り真定府に引退き防禦の備へ
とう呉三桂は真定を囲み九山の陣を張り鉄波を施


呂三桂
射劉崇文

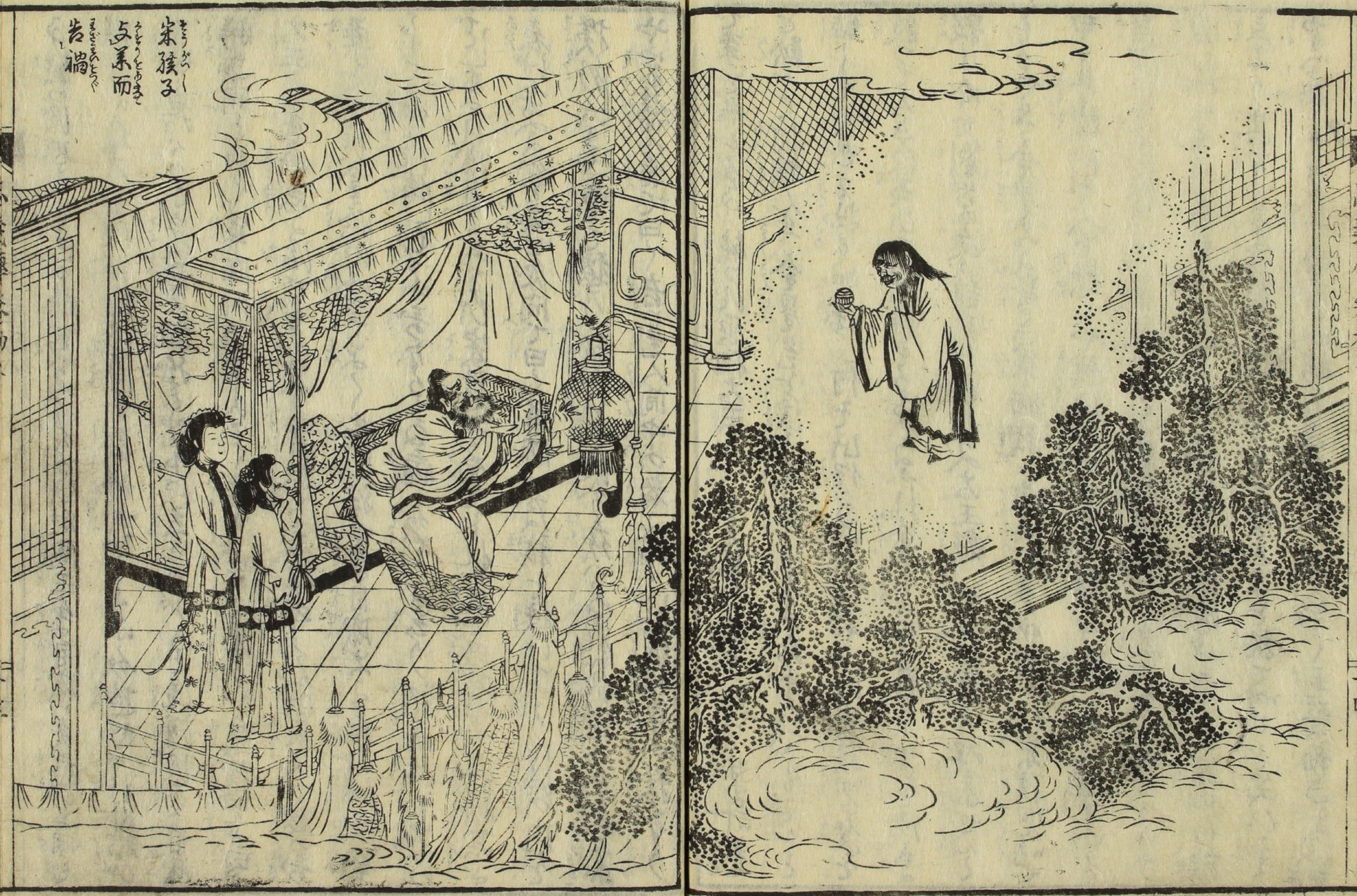
て押登る李自成劉宗文と大ゐ軍よ飛し六万の軍兵を率て出て防き戦しむ且賊軍より西洋炮を放ち火珠を飛せる霰の数ごとく飛しといへども紙のよろひの軟なるに弘弾飛び落て傷者なし劉宗文是を見て大きに怒り赤兎馬に騰て丈八の蛇矛を奔し呉三桂を目一窠と陣中に衝入れば呉三桂何ぞ怖べしも猿猴なる偃月刀をとつごし馬を躍らせ劉宗文と二十余合戦ひけるが双方劣らぬ強勇なれば勝負はまだみへざりけるが呉三桂馬の頭を返し俄に負て引退く劉宗文大きに怒り汚なし返せと呼はり馬を飛して追かくる処呉三桂虎尾に刀を弓に矢をつがひ後さまに射ければ劉宗文が内冑をぐさと射通し馬より倒に落死しけるが大強無双の劉宗文かくなく討れ給ひぞ賊の陣は乱て鎧き甲を棄て戈を拋ち先を争ひて敗走れば呉三桂が総軍鐘を鳴し囲を衝り追詰く討ければ闖王李自成自悍子槍をひらめかし当るを幸ひ防ぎ戦ひまて肉より十丈山へ跨驀を乱して斬立けるに孔山の陣より討出る流矢李自成が肩に深く討返馬よりがばと落てけるが従卒驚き扶けて営へ帰りける呉三桂が軍兵盃様よ乗り散花微塵に斬散せば賊軍討るる者麻のごとく数千人と云数をしらずに此時日既西に沈を埋伏の兵のみんも見えなく呉三桂は軍を揚させ退けば賊は幸よとして寨に帰り汗馬よ休息させる

李自成死羅公山

李自成が幕下ね仮よ悪相の官を授けし牛金星出て数進の云みなく自成を殺し権勢を奪んと計けるに智は宋孫四よあり勇は劉宗文よ誇り徳は李巌にありてもいづれ事をなしがたく虎く月日を

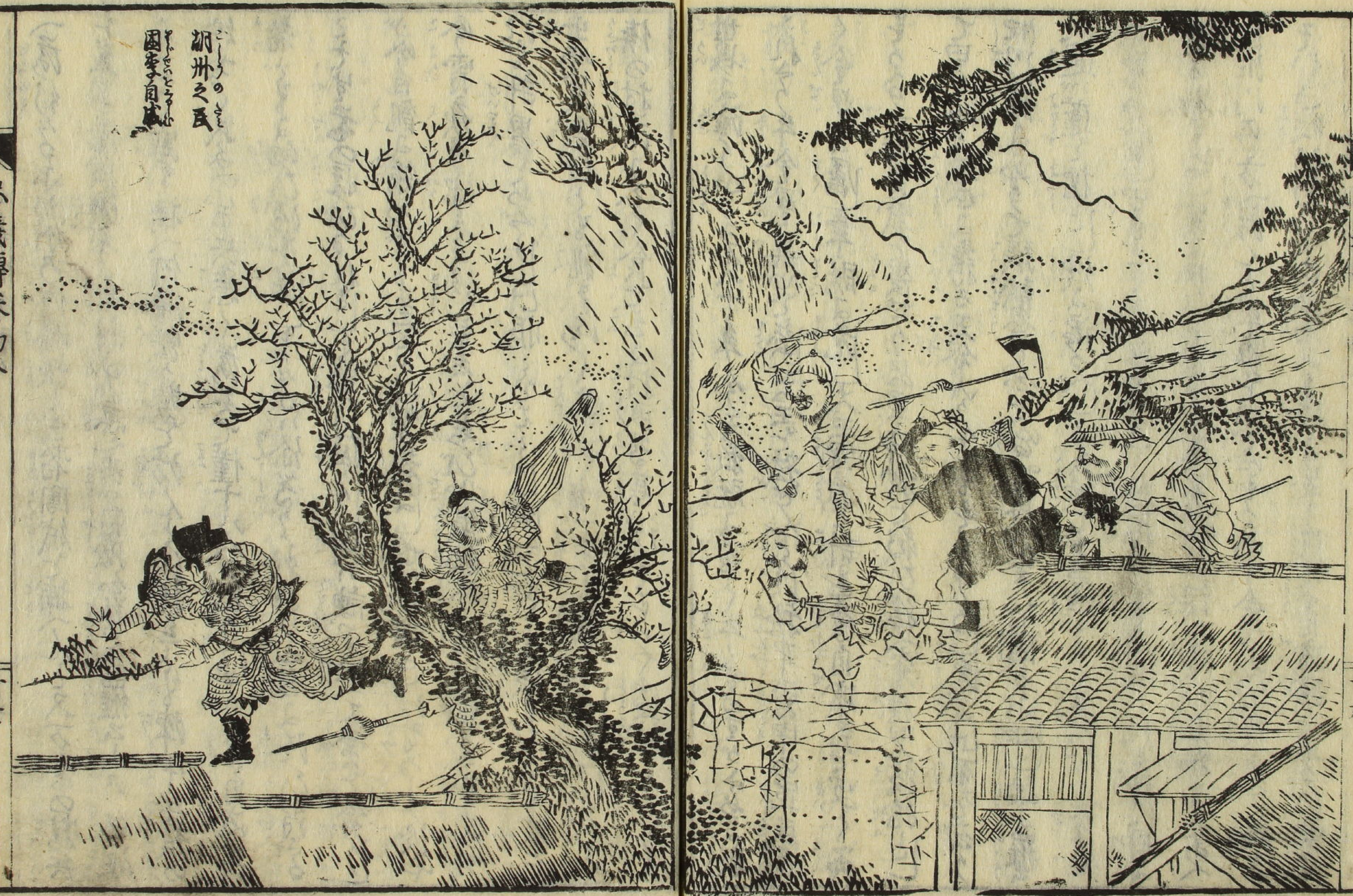

羅睺星
帰レ天

送りけるが先に讒言を構へて李巌を害ひ今又劉宗敏は呉三桂が為
に討死し今は只有者唯侏儒の宋孩児一人のみ李自成は矢庭に害んとして
猶に外ぬ今の我計あまりとも李自成が勢ひ先日より前に呉
三桂清国の大軍にて従軍皆離れそむき既に滅亡に及びなんとす
李自成が従と集ふとも更に益なし不如李自成が首を先呉三桂に降
参して大義計るべしと心に思案を定め刀抜持李自成が卧たる所
居間へ走り行に牛金星も同じく行やと暫く見る若ありて金星驚き
既にかくしと意ともれば則宋孩児之牛金星をそこで作りぬ俯して
汝し軍師何すれぞ留め給ふや大王今矢庭に衆軍悉く離る
を如何いかぬ計として大敵を防ぎ給はんや我此事を議せん為此に
至て大王を見んとて宋孩児莞尓として答て曰実に大王矢庭
で来を弁ざるは誰かは悪相大王に代て大業を図り給はで某計策
を勧じて相扶ん牛金星先を安くる事にて起ぶるへどもまさと
辞して曰某才拙く智浅し何ぞ此任に当るべきや此附宋孩児怒を
発つて大きに笑ひ悪相辞するなるれ汝先に李巌を讒言に
殺し今日劉宗敏が討死を悦びて大王殺して呉三桂に降参せんと
するや牛金星大に驚き軍師我を嘲弄するなるれ宋孩児怒て
曰く牛賊何ぞ人を欺くや我汝が逆心の智あるを引き牛金星今は
逃れじと甚怒り大刀を震つて宋孩児が頭より真二つに斬きりけり
勝むべし其手を應ざると切ども切目より血流るる一通の白煙
立上り其中に宋孩児が肺ありくと現れて是を掴て河々と笑ひ虎
中へ飛きりける牛金星心勝くる甚しく身寒く毛發動き更に言


宋孩子
与業而
告禍

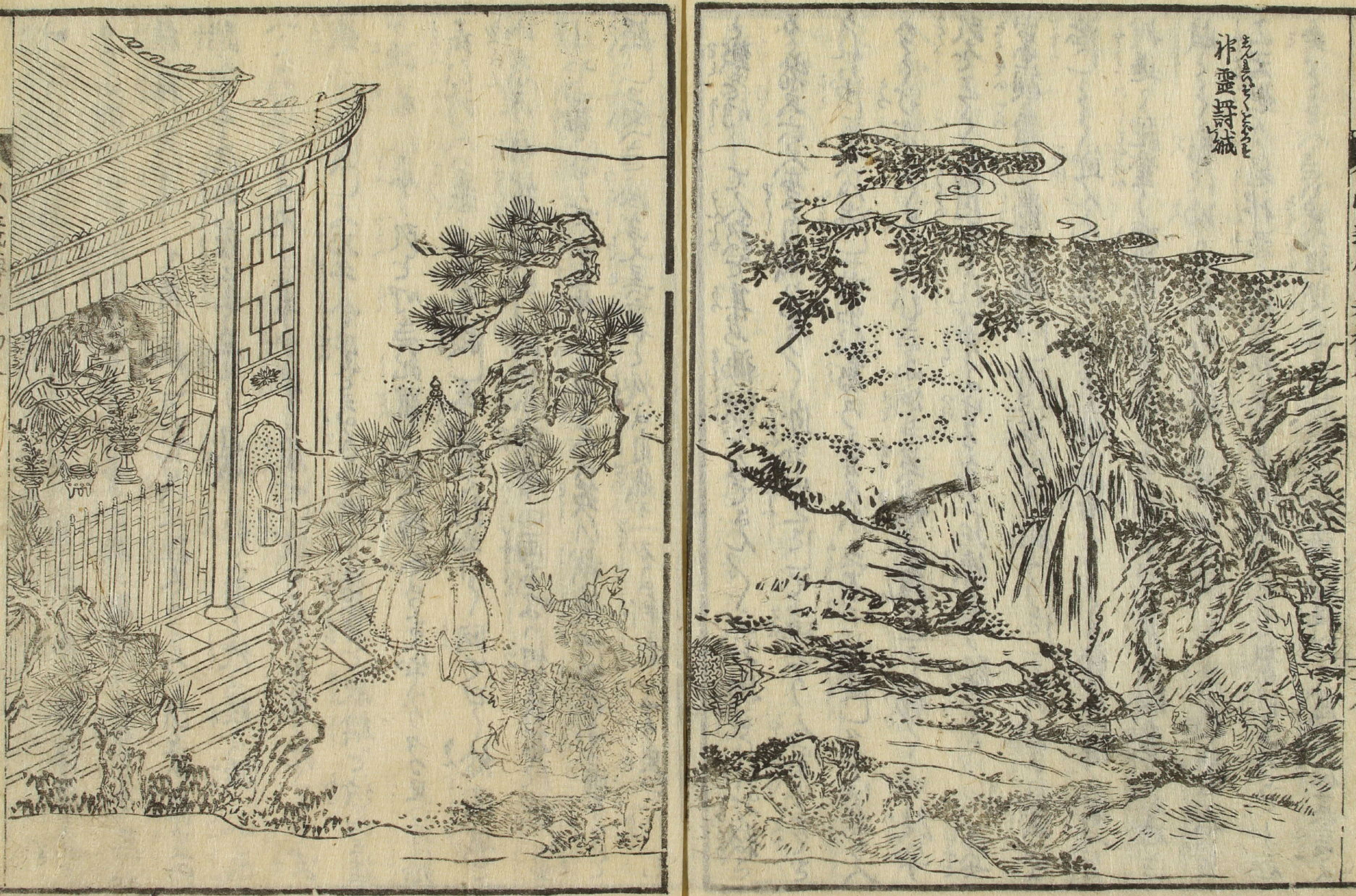
る手続の乃悉まてく己が陣所へ入りけるに附属王李自成は矢疵の痛み
堪がたく燈乃下に紅錦の褥を敷婦女にまで扶抱せられ呻吟て
悩み居たるに宋孩児飄然と燈下に立あらはれ流涕して李自成
に向ひて曰く軍師何の事ありて夜中営中に来るやと宋孩児が曰く
大王の矢疵急に治せざれば今宵忽ち大難至らんと此薬一盒の妙
薬を是乃金瘡に塗て早く愈し給へ李自成大に喜び侍女に命
じて疵口に傳しむるに妙なる哉痛み忽ちに去り起居も常の
ごとし李自成甚よろこび宋孩児が面を見れば其色蒼く其状甚ざ
衰げなるを怪み問て曰く軍師一度我を救けてより血海の内を
披歴しいまだ曽て慈の報を得ず今顔色の憔悴たるを見
や宋孩児答て曰く吾は是人間中の者にあらず羅睺星の精なり

世界に降り出る事又十年今天数既に盡て牛金星が命は数
されたり牛金星異心を發し大王を弑せんとし汎中営中の軍民多
く金星に屬し事既に危し大王宜しく是を計り李自成是を聞て驚
きたる事一度大我を喪せり只軍師我を救ひ給へと宋孩児愁然とし
て曰く汝が運正に窮る天命いかんともすること無し速に此所を去り
汜川の地に至りて張献忠と心を合せ再び事を図るに如じ路に羅芸
に遇ば蓬と拠とし総に語るべしと云ひ終て轉ぐく失にけり李自
成驚き悟しいまだ止ずとをとがまど松風の響き颯々たる外に目に
遮る物もなし営に持ひく李自成宋孩児が詞に従ひ立物も取あへ
ず汜川の方へ発んと軍勢を點呼するに十余万の鉄騎悉く離
そむき従ひ行んとする者又次第に至ずりて李自成涙をふるひ西の方


湖州之民

一旅行なる江州の何騰蛟と云者闖賊を捕へんと又一万余の精兵を集め落公遊り来討んと急之李自成が驍き羅公山の険阻によつて寨を構へ何騰蛟が勢を防んとは抗しども陣中兵粮の絶たるに又その賊兵は悉く落失て僅十八人となりしかば李自成甚い者どもに向ひ涙を流しやなるは汝等が孤きまで君に従ひ背ざるこそ生前の喜びなれしも勢ひ猛りし時は諫を仕へて忠を命かけしが今日飢に餘めども尚ほそ人眼る者なし世には情き次第なりけりや今宵夜の深きに紛れ寨を忍び出張献忠が四川営にぞ赴かんにも計略を以て眼をくらまし退るとそぞろに自従するとも寨を出西方へ急げども飢ますます甚しく唯一歩も進ことかなはず是によつて傍の村落に入て食を乞に村民等甚う訝りとや盗賊ござんなれ

と鼓を鳴して人数を集め鋤鍬を以てさんざんに打擲これを打殺さる李自成六人の者と自成は辛うく逃出山上にして這より人里も見ざれば山に入りに至り其の廟の有けるに立寄て休息しけるに忽ち人家の相ふで倒き足疲れ身痛く動くこと能はず頭をさげて廟内を見れば中に生たる如くなる像あり容姿を崇禎帝の霊じ給ひし御容によく似たりきしもの李自成はこ怒し是々逆んとはいえど無念なる有様にて雷落るも動く様子なく百姓等登り盗賊は寨にありと鍬を以て首を微塵に打擲き健らく家に帰り嗚呼闖賊は君后を弑し下庶民を苦しめ上天地の冥神悪みて野夫の手に備て之を斃れも乃なりけん斉しくべきは宋後の猴児が十八孩児及び羅公蓮桃の讖皆符甚く是に


詐靈将城（きんまのぞくとなるを）

叶へり去程に柵軍呉三桂ハ十又一万乃軍兵を率し瀋陽道へ朔
なるに湖州の阿膝殷羅云山にて李自成が砕けたる首をとりて呉三
桂が陣所に来り首を献じたれバ呉三桂大によろこび其の弟呉の
謀を問ふに即羅云山に登り自成が屍と首と縫ひ返り復し小京
へとて送りたる程に牛金星に属せし賊等変に自成が死せるを受
賊に心を変じたる牛金星をとらへて縛り甲冑を脱ぎ旗を伏せ呉三桂
が陣前に来り死と叩き罪を詫へ降人となりて出でたる呉三桂称
喜び降人ハ悉く之を赦し牛金星を引出して向て曰く徐周賊と
小京乃破北門を出し崇禎帝の両太子ハ何処の寺に隠し置
しや審らかにせよと云牛金星大に笑ひ我後何の為に両太子を
隠し置べき汝が父呉襄ハ既に自成が一刀に斬殺したる呉三桂
を聞て激しく怒りて数多自ら剣を接く牛金星を三刀刺殺し
殺して其屍を京城に送り自成と同く礫にかけて罪を正し都
下の軍民之を見て悦び勇むる限りなし

繪本國姓爺忠義傳初篇巻之八終